

一 般 社 団 法 人 日 本 体 育 学 会

体育心理学専門領域会報

第25号（通巻第53号）

体育心理学専門領域

2013年7月発行

一般社団法人 日本体育学会体育心理学専門領域会則

- 第1条 本会は、一般社団法人日本体育学会 体育心理学専門領域と称する。
- 第2条 本会は、体育・スポーツに関する体育心理学研究の発展のため、会員相互の情報交換を行い、研究と実践を推進することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行なう。
- (1) 研究会の開催
 - (2) 会報の発行
 - (3) 会員の研究に資する国内、国外の情報収集と紹介
 - (4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同する者で、会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
- (1) 会長 1名
 - (2) 理事 12名
 - (3) 監事 2名
- 第6条 役員を選出は、次の方法で行なう。ただし、末位が同数の場合は抽選とする。
- (1) 会長は、会員の単記無記名投票による最多得票者とする。
 - (2) 理事は、会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする。
選挙とは別に事務局から2名の理事を選出し、庶務・会計を担当する。
 - (3) 理事長は、理事の単位無記名投票による最多得票者とする。
 - (4) 監事は、会員の中から会長が委嘱する。
- 第7条 役員の任期は、4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。ただし、事務局選出の理事はこの限りでない。
- 第8条 本会に理事会を置き、会長および理事でもって構成する。
- 第9条 理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会を置く。
学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会
ただし、庶務・会計委員会は、事務局選出の理事が担当する。
- 第10条 会務を補佐するため、会長の指名により幹事若干名を置くことができる。
- 第11条 本会の会議は、総会および理事会とする。
- 第12条 総会は、次の事項を審議決定する。
- (1) 役員の選出
 - (2) 事業報告および収支決算
 - (3) 事業計画および収支予算
 - (4) 会則の改正
 - (5) その他
- 第13条 総会は年1回、日本体育学会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第14条 本会の経費は、会費、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第15条 本会の会費年度は、日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門領域総会までとする。
- 附則
1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定し、移転する。
 2. 本会は、日本体育学会の依頼により、日本体育学会関連役員等を選出する。
 3. この会則は、平成21年8月27日から施行する。
 4. 平成24年4月1日より、日本体育学会が一般社団法人に移行したため法令により、「体育心理学専門分科会」を「体育心理学専門領域」と改称し、本会則の名称を「体育心理学専門領域会則」と改称する。

体育心理学専門領域の役員

任 期：平成25年4月1日～平成27年3月31日

会 長：中込四郎

理事長：関矢寛史

理 事：学会大会委員会（○今中國泰、磯貝浩久、佐々木万丈、土屋裕睦）

企画委員会（○伊藤豊彦、東山明子、杉山佳生）

広報委員会（○石井源信、菅生貴之、森 司朗、内田若希、荒井弘和）

庶務・会計委員会（武田守弘、田島 誠）

○委員長

監 事：田村 進、木島章文

幹 事：佐々木丈予

事務局は広島県東広島市鏡山1-7-1広島大学大学院総合科学研究科・関矢寛史研究室とする。

一 般 社 団 法 人 日 本 体 育 学 会

体育心理学専門領域会報

第25号（通巻第53号）

体育心理学専門領域

2013年7月発行

巻頭言

体育心理学専門領域「会報」（第25号）の刊行によせて

体育心理学専門領域会長 中込四郎

体育心理学専門領域事務局は、昨年度、大阪体育大学から関矢先生を中心とした広島地区の先生方にバトンタッチされ、新たに組織、運営がスタートして4カ月が経過いたしました。この間、学会大会の企画、会報の刊行、他、専門領域の活動をリードしていただき感謝申し上げます。

規模の拡大と同時に専門領域間およびそれらに所属する個別研究領域の細分化が進む本学会において、凝集性を維持してそれを高めるにはどうすべきか、思いを巡らせてみました。そのきっかけとなったのは、数年前から始まった、私ども筑波大学体育学修士課程における修士論文中間発表会でした。恐らく、会員が所属している多くの大学では、状況が異なり、むしろ取り立てて語るほどの事でもないのかもしれませんが。しかしながら、100名近くの体育教員を擁し、しかもそれぞれが高い専門性を有している集団にいと、自分の専門領域外の研究に直接触れる機会が極めて少なくなっていることに気づかされます。修士学生の論文発表においてもしかりです。これまでは、研究室ごとに関係する先生が集まり、中間発表会が個々に実施されてきました。それは、私の体育心理学研究室においても同じ状況にありました。私の中では、ここでの個人的な体験が、日本体育学会における各専門領域に所属する会員の有り様とイメージレベルで重なるのです。

筑波大で新たに導入された中間発表会では、体育・コーチング・健康体力学の3分野に分かれ、それぞれの分野内での多様な研究領域から学生の発表がなされるようプログラムがされています。したがって、必然的に私も他領域の先生に交じって、他領域の修士学生の論文の進捗状況に触れ、時には質問を投げかけることになります。このような企画がスタートした初年度は、正直に申し上げて、戸惑いやその意義を十分に認識できずにいました。例えば、体育史や体育・スポーツ哲学領域、他、自分の専門

性からはほど遠い会場（旧専門分科会会場）での研究発表に参加した状況を想像していただければ、了解していただけるのではないかと思います。しかし、われわれの発表会も回を重ねていくと、短い時間内での質疑応答とはいえ、双方にとって貴重な機会となっていくつあるようです。

専門領域以外の研究者でも理解できる研究発表は、“現場から乖離している”との批判の軽減や解消にどこかでつながっていくのではないかと考えています。かなり高度に分化したそれぞれの研究領域ではあっても、研究の全てを理解することは望めませんが、発表した研究の「入り口」（その研究の目的、意義）と「出口」（その研究の成果）ぐらいは、聴き手、読み手に伝わるべきであると考えています。

結果として、修士学生は、発表会において日頃の指導では交わされることのない、専門外の先生たちによる異なる切り口からの質問に的確に応えようと頑張るだけでなく、専門外の先生にも理解していただくよう準備するようになります。もちろん、私たち教員側も他領域からの研究発表に対して、質問内容を吟味いたします。

体育学会ほどではないにしても、体育心理専門領域においても細分化が進んでおり、そこでの凝集力の低下が危惧されます。研究として取り組む課題やアプローチの方法だけでなく、研究成果の発表の仕方そして聴き方からも、今後、工夫して行く必要があります。一方で、多くの参加者を引きつけるような学際的なシンポジウムを企画し、専門領域外の人たちとの交流をはかりながら、さらに魅力あり、かつ有用な研究課題の創出を目指せることを願います。

体育心理学専門領域会報 第25号
目 次

巻頭言	i
目次	ii
I. 日本体育学会第63回大会関連	
1. プレセミナー	
題 名：自己成長を図るテニス授業の進め方 ー競技スポーツと生涯スポーツを結ぶー	
司 会：荒木雅信（大阪体育大学）	3
演 者：竹村りょうこ（慶應義塾大学大学院）	4
傍聴記：佐藤孝矩（大阪体育大学大学院）	5
2. キーノートレクチャー1	
題 名：ロンドンオリンピックに向けたJISSの心理サポートの取り組み	
司 会：西田 保（名古屋大学）	6
演 者：立谷泰久（国立スポーツ科学センター）	7
傍聴記：福井邦宗（びわこ成蹊スポーツ大学）	8
3. キーノートレクチャー2	
題 名：体育・スポーツと心理社会的スキル教育	
司 会：磯貝浩久（九州工業大学）	9
演 者：杉山佳生（九州大学）	10
傍聴記：小畑昭仁（防衛大学校）	11
4. シンポジウム	
題 名：動きをみるー学習や指導に活かす観察の視点ー	
司 会：関矢寛史（広島大学大学院）	12
演 者：中本浩揮（鹿屋体育大学）	13
「身体でみるー指導言語に潜む運動感覚情報の意味ー」	
演 者：松尾知之（大阪大学） 野球の投球動作指導の着眼点	14
演 者：山崎朱音（静岡大学）	15
ダンス指導者の指導言語の背後にある動きをみる観点と知識	
傍聴記：筒井清次郎（愛知教育大学）	16
5. 口頭発表（座長報告）	
座 長：東山明子（畿央大学）	17
座 長：佐々木万丈（日本女子体育大学）	18
座 長：兄井 彰（福岡教育大学）	19
座 長：豊田則成（びわこ成蹊スポーツ大学）	20

座 長：伊藤豊彦（島根大学）	21
座 長：上野耕平（鳥取大学）	22
6. ポスター発表記	
発表者1：竹内竜也（鹿屋体育大学）	23
発表者2：小川千里（近畿大学）	24
7. 大会参加記	
大会参加記：小谷克彦（北海道教育大学）	25
II. 研究会の活動報告	
スポーツ社会心理学研究会：杉山佳生（九州大学）	29
メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会：高妻容一（東海大学）	30
運動学習研究会：門田浩二（大阪大学）	31
臨床スポーツ心理研究会：松本香奈（岐阜女子大学）	32
スポーツ動機づけ研究会：渋谷崇行（新潟県立大学）	33
III. 研究室紹介	
研究室紹介：磯貝浩久（九州工業大学）	37
IV. 学位論文紹介	
仲里 清（九州共立大学）	43
河津慶太（福岡市スポーツ協会）	45
幾留沙智（鹿屋体育大学）	49
高橋まどか	51
V. 海外情報	
片上絵梨子（イギリススポーツマス大学院）	55
VI. 日本体育学会第64回大会関連	
日本体育学会第64回大会案内	59
VII. 事務局報告	
平成24年度日本体育学会体育心理学専門領域 第2回理事会 議事録	63
平成24年度日本体育学会体育心理学専門領域総会資料	65
平成24年度日本体育学会体育心理学専門領域総会議事録	67
体育心理学専門領域「新旧理事の会」議事録	69
平成25年度日本体育学会体育心理学専門領域 第1回理事会 議事録	71
資料1	73
資料2	74
資料3	75

I．日本体育学会 第63回大会関連

座長報告「自己成長を図るテニス授業の進め方 ―競技スポーツと生涯スポーツを結ぶ―

荒木雅信（大阪体育大学）

2012年8月22日から24日まで、東海大学湘南キャンパスにおいて日本体育学会第63回大会が行なわれた。体育心理学専門領域では、昨年は諸般の事情を勘案してプレセミナー、懇親会を実施しなかった。今年度、企画委員会（橋本公雄先生、石井源信先生、阿江美恵子先生）では、昨年度分を含めて2年分（？）を実施した。

プレセミナーは、竹村りょうこ先生（慶応大学大学院 政策・メディア研究科博士課程）をお迎えして、「自己成長を図るテニス授業の進め方 ―競技スポーツと生涯スポーツを結ぶ―」というテーマで、講義と実技を行なった。参加者は、会員22名と学生18名（東海大学女子テニス部他）の合計40名であった。

講義は、「技術編」・「心理編」の2つで構成されていた。前半の「技術編」で先生は、スポーツ（勝つこと）の楽しさから習得する（上手くなる）楽しさについて、テニスへの「好奇心」が継続の源であることを前提にして、スキル習得のバリエーションについて解説された。まず、ラケットを持たない練習で身体の使い方やボール感覚を養うこと、コート上での動き（フットワーク）をイメージしたドリルの重要性について、動画を用いて解説された。次に、「眼を鍛える」と題して、テイクバックのタイミングを例に、これも動画を用いて上級者との違いを解説された。これらから、テニスの楽しさを感じて、継続して練習していくための技術練習のポイントを示して頂いた。まずは、動けることが、楽しさに繋がるようである。

「心理編」では、先生が8歳からテニスを始められて、ジュニア、学生、プロ選手時代を通しての経験を例に講義された。先生は、現役選手時代の輝かしい戦績を残されていますが、お話を伺うとジュニア時代は決して順風ではなかったようである。そして、プレイ（動き）の「見方」、気づいたときに、強くなる（上手くなる）転機が訪れたと、その「気づき」がやはり先生の非凡さではないだろうか。その中で、初心者あるいはジュニア選手に対して「どうしてもできない・どうしても取れない、走れない」など、返答のできない指導は禁物であること、選手は、「出来ないのではなく知らない」だけであると解説された。しかし、基本的なスキルや知識を得た後は、「教えない」指導が大切ともいわれた。これが、選手自身の「気づき」に繋がるのだと思う。また、「不安・緊張・プレッシャー」が無いと、積

極さ（ポジティブ思考）が産まれないと、これを「9（ネガティブ思考）；1（ポジティブ思考）」と先生は表現された。

そして、最後に練習や試合で経験したことを自分の中で「理論化」することが重要であることを示された。“こころ”を理論化・体系化することは重要な心的作業であろう。

講義に続いて、実技を行ない実体験した。残暑厳しい中、還暦をとっくに過ぎている先生方、上級者・初心者を含めて22名の会員に対して、13名の東海大学女子テニス部学生がサポートに入ってもらった。実技では、テイクバック練習・ラリー・2対2（ダブルス形式）・ダブルス（ゲーム）を約2時間半行ない、たつぷりと汗をかいだ。（熱中症に罹った会員はいませんでした）実技に参加された先生方は、女子学生の的確で親身なサポートを受けてテニスを堪能された様子でした。（テニス部の学生さんありがとうございます）

講義・実技に続いて、松前会館で懇親会を行ないました。参加された先生方は、今回のテーマである「自己成長」を十分に図られたこと、また、来年度のプレセミナー・懇親会の企画にも繋がったことと思います。

東海大学・吉川先生、高妻先生、竹村先生と研究室の皆さん・東海大学女子テニス部学生の皆さんには、準備から実施までお手数とご配慮を頂きました。記して感謝とお礼を申し上げます。



荒木雅信氏

演者報告

竹村 りょうこ（慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科）

この度、体育心理学専門領域プレセミナーにおきまして、「自己成長を図るテニス授業の進め方—競技スポーツと生涯スポーツを結ぶ—」というテーマの元、講義と実技の講師をお引き受けさせて頂きました。どのような内容、タイトルがふさわしいのか、ということからスタートしましたが、橋本先生、石井先生、阿江先生とのお話の中でキーワードを頂き、体育とテニス、競技スポーツと生涯スポーツ、自己成長、という観点から、内容を検討していくこととなりました。これらは、私自身が競技者として、また指導者として、自らの体験を振り返った際にも大きな意味を持っており、特に「自己成長」というキーワードは、私自身最も重要視しているテーマであります。

講義では、「技術編」「心理編」の2つで構成し、前半の「技術編」では、テニス実技経験の有無に関わらず、基礎的な運動の習得によってテニス技術の指導に繋げることが可能であることを、実際のコート上での映像を元に説明させて頂きました。技術編で強調したのは、重要な技術を習得するために、「ラケットはいらない」という点です。ラケットスポーツは道具を持つことによって、個々の個性によって技術習得が可能になりますが、やはり、どの方にも共通する「コア（体幹）」部分の習得により、基礎から応用として上達することが可能になります。他にも、「投げる」、「滑る」といった運動の習得が、ラリーやゲームといった自分の体をコントロールしてボールを打つという技術の向上に一層幅と面白さをもたらすと考えます。

「心理編」では、現在までの競技者としての実体験のエピソードを交え、指導の際の問題提起としてお話させて頂きました。「回答のできない指導（どうしてできない？ どうして取れない？・・・）」に対して、疑問を呈すること、また、「教えない」必要性など、一見矛盾するようなキーワードも内容として置きましたが、ご参加されていた先生方とのディスカッションを通じ、「共通して必要とされるようなスキルや知識を伝え、その中から自己成長を促し、気づきにより、技術や心理面の習得をもたらす

こと」が、指導者として受講者に対して持つ最も重要な点ではないかと、この講義を通し私自身明確になったように思います。

実技では、講義映像でも用いた「テイクバック」に繋がる基礎的な運動を体感頂き、その後は、実際に活きたボールを打つことによって、ご自身のリズムやテイクバックの感覚がどうであるかを実体験させて頂きました。6面を使用し、東海大硬式女子テニス部の学生とそれぞれラリーや、ダブルス練習、最後には全体でのダブルスゲームを行いました。初めてテニスをされる方から、熟練者の先生方まで、どのコートにおいても、良いコミュニケーションと、白熱したラリーが展開されていました。

懇親会では沢山の先生方や参加者の方とお話することが出来、1日を通して大変貴重な経験をさせて頂きました。最後になりましたが、橋本先生、石井先生、阿江先生、荒木先生、当日も隅々までご配慮いただいた吉川先生、高妻先生、東海大学硬式女子テニス部の皆さん、沢山の助言とサポートを頂き本当に有難うございました。

今後のさらなる体育心理学領域の発展を願いまして、演者報告とさせて頂きます。



竹村 りょうこ氏

傍聴記

佐藤孝矩（大阪体育大学大学院）

初めて体育心理学専門分科会報に傍聴記を書かせていただけたこととなり、力量不足ですが、貴重な体験を感じたままに現せればと思います。プレセミナーのテーマは「自己成長を図るテニス授業の進め方ー競技スポーツと生涯スポーツを結ぶー」で、元プロテニスプレイヤーの竹村りょうこ先生から講義だけでなく、実技指導までしていただける非常に贅沢なプレセミナーでした。

まず約1時間半の講義では、技術編と心理編に分けられており、技術編では実際の動画を見せていただきながら、技術向上に必要なポイントを分かりやすく説明してくれました。「相手から打ち返されたボールがネットを越えるタイミングで状況判断し、テイクバックを始めると格段にショットの精度が増す」など非常に細かい部分ですが、このような小さな気づきの一つ一つが選手の技術向上には不可欠だと大変参考になりました。心理編では、竹村先生が競技生活の中で重要と感じられたワードを上げられて、それらをどのように改善や克服し、自己成長に繋げていったかを説明していただきました。私がとくに印象深く残っているのは、ネガティブ思考9：ポジティブ思考1のお話です。アスリートにとって9つのネガティブなことが、たった1つのポジティブに繋がり、その輝きをさらに増すといったお話でしたが、現在防衛的悲観主義を研究している私としては非常に興味深いお話でした。

後半の実技指導は、とても楽しくテニスをプレーさせてもらいました。これも竹村先生の人柄のなせる業であったように感じます。私のような初心者にはラケットの握り方、ストロークのポイント、サーブのポイントなど大変丁寧に教えてくれ、上級者の先生方にはそれぞれのレベルに合った指導をされながら、大人数かつ競技レベルに差がある集団に対しても非常に上手な実技指導だと、暑さにやられ、ふらふらの頭ながら感心してしまいました。実技指

導のメインであるダブルスの試合も、非常に盛り上がり、東海大学テニス部の学生が協力してくれたおかげで、技術レベルのハンデを埋めることも出来ました。しかし、私のペアになってしまった学生は普段の2倍以上コートを走り回らせてしまい大変申し訳なかったです。

以上がプレセミナーの大まかな流れですが、今回のプレセミナーを通して、やはり大切なキーワードとしてあげられるのは自己成長でしょう。橋本先生のお言葉をお借りすると自己成長とは感動する事です。自らを成長させるために常にアンテナを張り巡らせて、強く心を動かされる感動体験を今後も研究生活の中で味わっていきたいと考えています。

最後になりましたが、竹村先生の熱心なご指導のおかげで私もテニスの上達と多くの自己成長を感じました。本当にありがとうございました。また、ぜひご指導いただける日を楽しみにしています。



司会報告「ロンドンオリンピックに向けたJISSの心理サポートの取り組み」

西田 保 (名古屋大学)

2012年夏のロンドンオリンピック。日本は過去最多のメダル（38個）を獲得した。帰国後に開催された銀座での凱旋パレードは、約50万人ものファンで熱狂した。これらの成果には、メダリストたちの能力や努力は言うまでもないが、選手への様々な方面からの取り組みも少なからずいや強く影響していたと思われる。

キーノートレクチャーは、体育心理学専門領域の「学会大会委員会」が作成した原案を理事会承認のもとで開催されるのであるが、今年はオリンピックの年にあたることから、この点に特化した内容が取り上げられた。そして、北京オリンピックからロンドンに向けて、多くの選手に継続して心理サポートを行ってきた国立スポーツ科学センターの心理グループに白羽の矢が立ち、リーダー核の立谷先生が演者に決定した。当時の会場には、演題への関心だけでなくオリンピック終了後の翌週に開催されたというタイミングもあり、136名もの参加者が足を運んでくれた。

演題は「ロンドンオリンピックに向けたJISSの心理サポートの取り組み」であり、発表内容は、北京からロンドンに向けて本格的にスタートしたマルチサポート、チーム帯同心理サポートの内容と進め方、個別サポートとチーム帯同心理サポートとの違い、ロンドンで行ったことや諸外国の状況、これからの心理サポートなどであった（詳細は、演者報告を参照）。いずれも大変興味のあるトピックスであり、現在心理サポートを行っている人あるいは今後心理サポートを志す人にとっては貴重な情報であった。ただ、もう少し突っ込んだ心理サポートの中身が聞きたいという参加者もいたように感じられた。たとえば、「選手や監督・コーチなどとの関係性（信頼性など）はどうだったのか、どのようにして構築するのか、どのようなサポートを行うと選手はどのように変わっていくのか、それは何が原因しているの

か、ロンドンではどのような心理相談があり、どのように対応したのか」などである。しなしながら、オリンピック選手を対象としているという特殊事情や守秘義務などからすると、それらについて詳しく報告することは困難であったと思われる。演者の立場を理解したい。また、選手あるいは代表チームとの「距離感」をどのように取ればよいのかという問題や、心理サポートの「押し売りをしていない」「余計なことをしない」といった指摘もなされ、心理サポートの難しさを改めて感じた機会でもあった。

「オリンピックは、スポーツ科学の勝負である」と言われている。したがって、今後は科学的に裏づけられた根拠のある取り組みが、今よりもさらに強く求められるであろう。本キーノートレクチャーが契機となり、心理サポートに関する研究や実践が、量的にも質的にも高いレベルで行われることを期待したい。

最後に、オリンピック選手への心理サポートに関する様々な情報を提供して頂いた立谷先生、ご参加頂いたフロアーの皆さんに深く感謝いたします。



西田 保氏

演者報告「ロンドンオリンピックに向けたJISSの心理サポートの取り組み」

立谷泰久（国立スポーツ科学センター）

最初に、このような光栄な機会を頂きました日本体育学会体育心理学専門領域の委員の先生方に深く感謝申し上げます。特に、西田先生（名古屋大学）には最初の打診を頂き、また発表内容について様々なご意見・ご指導を頂き、深く御礼申し上げます。今回、「ロンドンオリンピックに向けたJISSの心理サポートの取り組み-マルチサポートを中心に-」というタイトルで話をしましたが、このタイトルの通り、私個人が行ったことではなく、我々JISS・心理グループが取り組んできたことを代表者として発表させて頂きました。また、この発表資料を作る際には、JISS・心理グループの研究員とマルチサポートスタッフには多大な協力を頂きました。特に、武田研究員からは、マルチサポートに関するご自身の経験・重要なことを簡潔にまとめて頂きました。改めて深く感謝申し上げます。

本発表では、マルチサポートの全体の概要、チーム帯同の心理サポートの進め方、チームに帯同する際に重要視したこと、得られたこと、反省点、個別サポートとチーム帯同サポートの違い、そしてこれからの心理サポートなどについて話しました。ロンドンオリンピック終了直後でしたので、詳細な発表はできませんでしたが、皆さん興味を持って話を聞いて下さったように感じました。

チームに帯同する際に重要視したこととしては、「自分がチームに入ることによる影響を考えると」「選手のみならず、コーチのサポートも重要」などを挙げました。帯同のサポートを行ってきた、まさに「実感」として感じたことで非常に重要な点だと思います。次に、今回のサポートで「得られたこと」としては、「心理サポートの『押し売り』をしない」、「余計なことをしているかもしれない、迷惑を掛けているかもしれないと思いながらサポートを振り返ることが大事」というものを挙げました。より良いサポートを行うためには、自分が行っているサポートを客観的に振り返ることは非常に重要なことだと思います。また、今回のサポートの反省点

として、「競技団体に対する心理サポートの説明不足」「競技団体やJISSの他分野の方とのコミュニケーション不足」などを挙げました。この点については、しっかりと反省し、今後のサポートにつなげていきたいと思っています。

さらに、個別サポートとチーム帯同サポートの違いについても説明しました。「チーム帯同心理サポート」においては、選手個人が希求する「個別サポート」とは違い、様々なことに注意・配慮し、周りからの理解を得ながら行うことが重要という話をしました。そして最後に、「今後も心理サポートの重要性は増し、そして『個別サポート』も『帯同サポート』もより高いものが求められるだろう」という私見を述べさせて頂きました。我々には、心理サポート者としての資質の向上はもちろんのこと、人間的成長も求められると思います。私個人的には選手やコーチから「無用の用」と言って頂くために、日々頑張っていきたいと思っています。今回の発表で、フロアの方々がどの程度満足されたのかは分かりませんが、我々JISS心理グループが行ったサポートについて少しでもご理解頂けたら幸いです。これからも学会の先生方にご指導頂きながら、謙虚に地道にやっていく所存です。今後ともよろしくお願い申し上げます。



立谷泰久氏

傍聴記

福井邦宗（びわこ成蹊スポーツ大学）

去る2012年8月、ロンドンにて30回目の夏期オリンピックが開催され、日本は史上最高38個のメダルを獲得、選手達の活躍は大きな話題を呼んだ。そんな興奮も醒めやらぬ中での第63回日本体育学会における体育心理学キーノートレクチャー1の題目は、立谷泰久先生による「ロンドンオリンピックに向けたJISSの心理サポートの取り組み」であった。国内での熱気同様、私にとっても今最も興味を惹かれる内容であり、選手達の活躍の裏で実際にどのような心理サポートが行われているのかを知る絶好の機会となった。

国立スポーツ科学センター（JISS）の心理グループとして今大会に関わられた立谷先生のお話によると、JISSによる心理サポートの歴史は約10年前の2001年10月発足に始まり、2004年のアテネでは「メンタルのツボ」と称したメンタルに関わる項目を載せた冊子を配布、2006年トリノを経て、2008年の北京から本格的なサポートが開始されたとのことである。サポートの内容は、「チーム日本マルチサポート事業」として文部科学省からJISSに委託され、スポーツ医科学的サポートとして多分野から専門的なサポートが行われ、心理的なサポートもその中の一つに含まれている。

サポートについて印象に残ったのは、メンタルトレーニングの基礎や応用を学び、個別サポートを行うのはもちろん、スタッフへのサポートも加えたチームビルディングや、各種目の代表からの要望とJISS側の対応を綿密な打ち合わせにより方針のズレを修正し、また事後は必ず関わった複数名での反省、報告会を行う等の、きめ細やかな対応を内容の充実と共にに行っていることである。また大会期間中は選手村の近隣施設を貸し切り、マルチサポートハウスとしてJISS内と同じような環境を現場に作りサポートするという、徹底した選手へのサポート環境を作り支えていたのも印象的

であった。ここでは選手個々を重要視することを大前提とし、コーチの指導の邪魔にならないようにあくまで傾聴を基本に、特別な状態は作らず普段通り行うことが重要との先生の話に感銘した。

しかし、このような充実した内容の裏でやはり気遣うべき事柄や反省点も多く、他分野との相互理解と共有に向けた密なコミュニケーションの必要性や、選手が本当に望んでいるサポートが出来なかった為に、選手やスタッフとの距離感を工夫しなければならないこと、また通訳等の自身の業務以外の事でも関わってしまった等、現場ならではの反省もあり、サポートを行うにあたって、選手そしてスタッフとの適切な距離感を大切にすべきというような気づきもあったと先生は話していた。

最後に、今後について、日本のスポーツ環境の変化に留意し国際競技力向上に向けて、政治経済の動きにも関心を深めることの必要性や、トップアスリートにとって有益な研究を様々な角度から行い、学会や研修会を充実させ、それらを通じて学びを深め、更なる協力体制の構築や強化を図ることの重要性に言及されていた。「当たり前の事を地道にやっていくしかない」との先生の言葉通り、「無用の用」を目指し現場で出来る事を行うということが、心理サポートにおいては最重要であると痛感した。

今回立谷先生の貴重なお話を拝聴し、トップレベルのサポートの一端を知ることとなった。この学びを今後は是非私が現場で活かしていきたいと考えている。

司会報告「体育・スポーツと心理社会的スキル教育」

磯貝浩久（九州工業大学）

日本体育学会は、8月23日-25日の間に東海大学で行なわれた。大変暑い時期の開催ではあったが、大学構内には大きな木々が沢山植えられていてその木陰に入ると、爽やかな風を感じることができた。九州大学の杉山佳生先生の「体育・スポーツと心理社会的スキル教育」と題したキーノートレクチャーでは、心理社会的スキル概念の整理や体育・スポーツの心理社会的スキルへの影響について分かりやすく解説して頂き、レクチャー後にも爽やかな気分になれたように思う。

杉山先生とは数年前に西田保先生の科研プロジェクトで共同研究させてもらったことがあり、心理社会的スキルやライフスキルについて色々と議論したことがあるが、穏やかな口調で明快に持論を主張されていたように記憶している。レクチャーもそのときの姿と重なる部分が多かった。またご存知のように杉山先生は、日本スポーツ心理学会編の最新スポーツ心理学をはじめ、体育の科学や学術論文等に心理社会的スキルに関する執筆を数多くされており、そのような研究キャリアを充分に活かしたレクチャーだったと感じた。

レクチャーの内容としては、まず心理社会的スキルの概念について、類似する概念であり混同されがちな心理的スキル、社会的スキル、ライフスキルの各概念との関係に言及されながら解説された。心理社会的スキルは、上記の概念を包括する概念であることが理解できた。その後、体育・スポーツを通した心理社会的スキルの効果的実践のために重要な事柄として、4つの視点をあげられ説明された。それらは、1)スキルの般化を促進するためには、2)どのような人に効果があるのか、3)体育・スポーツでどのようなスキルが学習されるか、4)課題や経験によって学習されるスキルは異なるのかの4つであり、それぞれについてご自身の研究成果を例に取りながら分かりやすく説明

された。

個人的には、レクチャーのなかで話された「スキルはあくまで対処技能であり、人間的な深さを示すものではない」という言葉が強く印象に残った。人間性やパーソナリティは教育・研究していくうえで扱いにくい概念であるのに対して、スキルは対象にしやすい概念であるため、心理社会的スキルの教育・研究は重要になっていくと思われるが、スキルは人間全体を表すものではなく、あくまで人間の表層的な一部であるという認識が重要という主張にとっても共感した。最後に、近年心理社会的スキルについての関心が高まっているが、心理社会的スキルの概念や体育・スポーツのスキルへの影響の仕方に関して、研究者が共通認識を持つことが重要だと常々感じていたので、レクチャーはそのような意味でも大変有意義であった。



磯貝浩久氏

演者報告「体育・スポーツと心理社会的スキル教育」

杉山佳生（九州大学）

大学卒業後、全く違う分野から体育学の世界に飛び込み、分をわきまえて、あえてアウトサイダー的なことをやってきたはずの私が、体育心理学専門領域のキーノートレクチャーを担当するというのは、どうにも違和感があって仕方ないのですが、日頃からお世話になっている名古屋大学の西田保先生のご依頼ということもあり、恐縮しながら、お引き受けすることにいたしました。

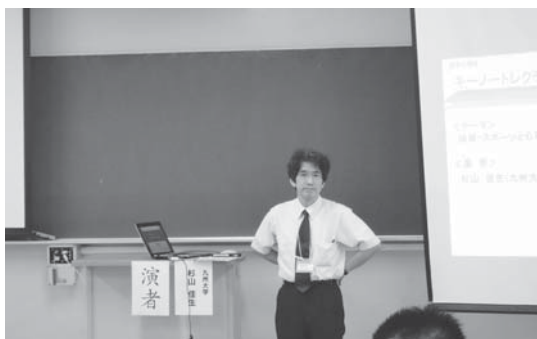
レクチャーでは、まず、関連用語（心理的スキル、社会的スキル、ライフスキル、心理社会的スキル）について整理をした後、それらと体育・スポーツとの関係について論じました。特に、「体育・スポーツを通した心理社会的スキル教育」と「スポーツ競技者の心理社会的スキル教育」との関係、および、「心理社会的スキルの獲得」と「人間・人格形成」との関係については、適切に理解されていないところがあると日頃から感じていたことから、少々力を入れて、説明させていただきました。

後半では、「心理社会的スキルの般化を促進するためには」、「どのような人に対して、心理社会的スキル教育の効果があるのか」、「体育・スポーツ場面では、どのような心理社会的スキルが学習されやすいのか」、「課題内容や経験によって、学習されやすい心理社会的スキルは異なるのか」といった問題意識から、これまでの研究を概観するとともに、より効果的な心理社会的スキル教育の実践に資する研究のあり方について、検討しました。そして最後には、今後の方向性を示すことを目的に、「身体教育と心理社会的スキル教育の有機的融合」、「文化的な問題」、「三元論的・相互干渉モデルから見た心理社会的スキル教育」、「プロアクティブ（先取り志向的）な心理社会的スキル教育の可能性」など、まだまだ注目されていない理論や考え方を取り入れた研究の必要性を訴えて、話を終わりました。ただ、いつものごとく、それまでの余談が過ぎて、時間が不足

し、これらの新しい視点について十分に紹介できなかった点は、申し訳なく思っております。またいつかどこかで機会を見つけてご説明したいと思いますので、今回はご容赦下さい。

このようなレクチャーの内容はともかくとして、私にとっての今回の最大の成果は、自分が専心的に関わっているテーマでありながら、まだまだ十分に考えが及んでいないことがたくさんあることに、私自身が気づかされたことかもしれません。たとえば、重要だと言い続けてきた般化の問題は、実はそれほど気にするものではないのではないか、などといったことが、話をしながら、妙に気になってきました。これらについては、今後の課題あるいは研究継続の糧として、気にとめておきたいと思っています。

最後に、今回私が一番驚いたのは、レクチャー後に、多くの方々から、ご質問やご意見を賜ったことでした。その場では質問できなかったと後からご連絡いただいた先生もおられ、大変うれしく感じた次第です。本テーマについて、広範な議論ができる土壌のあることがわかったということは、大きな収穫であったと思います。皆様、今後とも、心理社会的スキル教育研究を、よろしくお願い申し上げます。



杉山佳生氏

傍聴記

小坪昭仁（防衛大学校）

東海大学湘南キャンパスにて行われた第63回体育学会における体育心理専門領域企画のキーノートレクチャー2、杉山佳生先生（九州大学）による「体育・スポーツと心理社会的スキル教育」を拝聴いたしました。杉山先生が「60分のレクチャーなのに40数枚のスライドを用意してしまいました。」とおっしゃっていた通り、とても多くの視点から心理社会的スキルと体育・スポーツの関係についてお話いただきました。

前半は、主に心理的スキル (Psychological Skills)、社会的スキル (Social Skills) 及びライフスキル (Life Skills) を含む包括的用語である心理社会的スキル (Psychosocial Skills) とはどのようなものなのか、どういった特性なのかという内容でした。中でも、心理社会的スキルの本質は、学習によって獲得され、向上する「スキル」であるということを強調されていた点が印象的でした。つまり、あくまでもある事柄に対する対処技能・能力であり、人間的な深さを表すような特性と等価ではないということです。

後半は、杉山先生ご自身の研究結果を踏まえ、体育・スポーツにおける取り組みがどのような心理社会的スキルの獲得を促進するのか等の視点から心理社会的スキルと体育・スポーツとの関係に触れるといった内容でした。その中で、根上先生の体育授業のモデル（「三元論的相互干渉モデル」2006, 2009, 2012）を取りあげられ、挑戦・冒険的要素が包含された授業の重要性を指摘されていた点は新鮮に感じました。また、オープンスキルのスポーツにおける状況判断のような予測的運動制御が、プロアクティブ（先取り志向的）な心理社会的スキルの習得に役立つという点はとても共感できるものでした。

私自身は、日々現場でサッカーの指導をしています。そこでは、サッカー選手としての技術的な成長もさることながら、一人の人間としての人間的成長につながる指導を心掛けています。杉山先生のレクチャーを拝聴する中で、スポーツの場においては心理社会的スキ

ルの練習が適切に行われ、それが獲得され、その結果として人間的な成長に繋がるとの立場から「スポーツは人間的な成長に役立つ」と考えることが可能であるとお話しがありました。これを現場の指導者・教育者という立場から捉えると、学生・選手に「こういった点に気づいてもらいたい」「こんな風に捉えてもらいたい、考えてもらいたい」といった明確な意図を持つこと、つまり、指導者・教育者としての信念を持つことの重要性が指摘できます。これまで、サッカーの技術・戦術については詳細に考えていた部分ではありますが、人間的な成長という部分に関しても具体的にどのようなスキルにどのような働きかけをするのかという明確な意図が重要であるということを認識させていただく機会となりました。

近年、多くの体育・スポーツの研究において取りあげられている概念であり、今後も大きく発展するであろう心理社会的スキルの重要性を改めて認識させていただくレクチャーであったと感じています。この場をお借りして杉山先生に感謝申し上げます。

司会報告「動きをみる－学習や指導に活かす観察の視点－」

関矢寛史（広島大学大学院総合科学研究科）

大会の最終日である8月24日(金)の朝9時半から11時半まで、定員150名の会場がほぼ埋め尽くされるほどの参加者にご来場いただき、「動きをみる－学習や指導に活かす観察の視点－」と題したシンポジウムを行った。本シンポジウムの趣旨は、学習者にとっても指導者にとっても重要となる「他者の動きをみる」という行動において「よりよいみ方とは何か?」を探り、学習や指導に活かすヒントを得ることであった。

異なる運動課題を対象に異なる領域で研究している3名の演者にご登壇いただいた。まず体育心理学専門領域の中本浩揮先生（鹿屋体育大学）が、「身体でみる－指導言語に潜む運動感覚情報の意味－」と題して、観察者の脳における運動関連領域の賦活とその影響について、知覚運動転移、運動伝染、運動感覚錯覚、視運動感覚統合などの実験を紹介してくださった。要約すれば、「感じるようにみる」ことが重要であり、みる能力を鍛えるためには動きを学習することが有効となるという内容であった。次にバイオメカニクス専門領域の松尾知之先生（大阪大学）が、「野球の投球動作指導における着眼点」と題して、指導者の着眼点に関する質的、量的研究やバイオメカニクス研究に基づき、着眼点は80～130くらいもあり、一流指導者の着眼点のパターンはかなり異なること、しかしそれらの共通点を必須項目として指導に活かすことが必要であることなどを発表してくださった。最後に体育科教育学領域の山崎朱音先生（静岡大学）が、「ダンス指導者の指導言語の背後にある動きをみる観点と知識」と題して、表現・創作ダンスにおける「動きを引き出す指導」と「動きを評価する指導」場面について、指導言語には指導者の経験とそれに基づく知識構造が反映されており、指導言語の分析から熟練指導者が動きをみるときの視点を明らかにすることが可能となる研究例を紹介してくださった。

討論の時間においては、演者間ならびにフロアーと演者の間で活発な意見交換が行われた。自分である程度できるように運動課題を学習することの重要性、ならびに自分の経験の範囲を超える運動課題や遂行レベルであっても優れた指導者の観察の視点を学習することが指導に役立つということが強調されたような気がする。演者ならびに参加してくださった皆様、ありがとうございました。



演者報告「身体でみる一指導言語に潜む運動感覚情報の意味―」

中本浩揮（鹿屋体育大学）

「身体でみる一指導言語に潜む運動感覚情報の意味―」という少し大胆な（大げさな？）タイトルで発表させていただいた。このタイトルは、シンポジウムのお話を頂く直前に、2名のコーチの指導場面を拝見させていただいた時の印象からつけたものである。コーチの一人は、とある県で甲子園投手を多く育てられた方である。この方は、投球フォームをみて「今のは肩がひっかかる感じがしたぞ。だから、左手が視線より高くないようにしなさい。」と声を掛ける。もう一人の指導者は、生理学やバイオメカニクスなど様々な動きの勉強をされた方である。この方は、「君の肘は肩より低い位置で回転しているから、もっと肘を高くして投げなさい。」といった指導をされていた。野球の投球フォームにおいて、両コーチの持っている問題意識は同じであるが、その効果は圧倒的に前者が高かった。この指導の違いを主観的に言語から分析すると、前者は、投手が体験している外部から観察不可能な感覚をまるで感じているかのように指導しているのに対し、後者は、外部から観察可能な運動情報を基に指導しているように思える。つまり、うまい指導者は他者の運動観察によって、他者の運動感覚をみるといった印象を持った。その数日後、タイムリーなテーマでシンポジウムのお話を頂き、飛びつくように承諾をして、承諾をした後に実験データがない現実に気づき焦った次第である。このように、「他者の動きを感じるようにみるのが熟練者の特徴だ」という結論と締切りを守って出したタイトルだけが先行してしまうという中、何とかシンポジウムにこぎつけることができた。

発表内容の詳細は割愛させていただくが、運動感覚錯覚という現象を利用した実験を報告させて頂いた。結果として、他者の運動観察に優れる熟練競技者は、観察運動に応じるように運動感覚錯覚が変調するが、初級者ではそのような変調は生じないとい

う結果が得られた。また、本学の大学院生のデータをお借りして、運動観察中に運動感覚を外的に生起させると知覚精度（みる精度）が低下するという現象を報告させていただいた。これらの結果が意味することは、他者の運動観察に優れるものは、他者の動きをみることで運動感覚を感じ、その感覚を頼りに他者の運動を理解するということである。近年の知見からこの能力は、視覚経験の積み重ねだけでは獲得されず、運動経験が不可欠であると考えられる。これは本研究の発端である指導者二人にも当てはまり、感覚的な指導をしていたコーチは投手出身、視覚的な指導をしていたコーチは捕手出身であった。発表では、指導時に他者の運動を感じるように「みる」ために、自ら運動することが重要であると主張した。

しかし、シンポジストの松尾知之先生（大阪大学）と山崎朱音先生（静岡大学）のご発表をお聞きした後は、研究者が感覚で指導することが指導として最高で最適です、と主張することの未熟さに気づいた。誤解を恐れずに言えば、スポーツ科学は、定性的な感覚を超えて、現象を定量化することに目的がある。そして、定量化されたコンテンツを一般化可能な理論へと発展させ、広く現場に応用することが更なる目的である。自分の仕事は、スポーツ科学を知れば、競技として熟練者でなくても、指導者として選手のパフォーマンス向上を正しくサポートできるようにすることである、ということを思いだし、反省してシンポジウムを終えた。

演者報告「野球の投球動作指導の着眼点」

松尾知之（大阪大学）

【目的】本シンポジウム発表の主な目的は、野球の投手指導において、①わずか2～3秒で終了する投球動作に非常に多くの動作指導のポイント（着眼点）があること、②指導者によって、その着眼点が異なること、③多くの着眼点のうち、どの着眼点が指導者間で意見が割れない、統一した見解を持つ着眼点であるのか、を知ってもらうことであった。

【方法】さまざまなレベルの投手25名（中学生～大学生）の投球動作を、正面（捕手側）からと側面（右投手の場合、3塁側）の2方向からデジタルビデオで撮影した。その映像を11名の解説者注1）に見てもらい、長所や短所についてできるだけ多くコメントしてもらった。尚、この投球解説は1対1の半構造化面接方式で実施し、発話内容を逐語録として書き起こした。この発話データを基にカテゴリ化を行ったが、カテゴリ化は現場で意味が通る範囲内に留め、抽象化することはしなかった。

カテゴリ化されたデータを用い、まず各解説者が各投手モデルにどんなカテゴリの指摘を行ったのかを比較検討した。次に、動作相やカテゴリに大きな隔たりのないよう、また少ない説明文で誤解が生じないような30項目を選択し、プロ野球投手経験者463名、高校野球指導者2,232名、中学野球指導者2,731名に郵送方式でアンケート調査を実施した。このアンケート調査の目的は、どの着眼点が指導者間で統一した見解を持っているのかを知ることであった。

【結果および考察】カテゴリの総数は85で、サブカテゴリの段階では120という非常に多くの着眼点があることが明らかとなった。しかし、プロ野球投手や熟練指導者といえども、そのすべてを利用している訳ではなく、各カテゴリの発話頻度は解説者によって大きく異なり、どの着眼点に着目しているのかによって解説者の特徴が現れた。このことは、指導者によって選手の将来が左右されることを示唆

するものである。また、同一動作について、異なる指導を受ける可能性もあり、選手や経験の浅い指導者のために、各指導法の長所や短所を明確にするとともに、指導法を体系化する必要性が示唆された。アンケート調査の結果、動作指導に統一の見解が得られた項目が幾つか見られた。例えば、片脚立位時の軸脚の膝の向き、ストライド時の踏出動作などである。また、中学生の指導者だけの統一見解として得られた項目や、中学生および高校生の指導者の統一見解であるが、元プロ野球選手では統一見解とならなかった項目もあった。これらの項目は、各レベルにおいて最低限守った方が良いと思われ、そのような意味で投球の基本と言えよう。逆に、アンケートで意見のバラツキの大きかった項目は、投手によって、指導法を変えて良いと考えられ、投手の体格・体力的特徴に合わせた柔軟な指導が期待される。また、指導法の分類の際に重要な役割を果たす項目だと考えている。

本発表では、野球の投手指導を題材として扱ったが、指導者間で意見が割れるケースは、他のスポーツでも同様に見られることであり、本研究の方法論を適用することによって、多くのスポーツの指導体系を整備できるものと考えている。

注1）解説者の詳細については、文献（松尾ら、体育学研究、55(2)：343-362, 2010）を参照のこと。

演者報告「ダンス指導者の指導言語の背後にある動きをみる観点と知識」

山崎朱音（静岡大学）

テーマを受け、運動に対して様々な思いをもつ学習者に、運動の楽しさ・特性を味あわせ、そして学習させるという体育科教育の立場から、「表現・創作ダンス（以下、ダンス）」の「動きをみる観点」について発表した。特に学校体育で取り扱うダンスは、振付のある踊りを踊るのではなく、個々がテーマや題材のイメージや感じを捉え、それを身体で自由に表現することを特性とした運動である。その中核的な技能である「即興表現」の指導では、指導者は、学習者の本来持っている動きを最大限に引き出す指導を、即時的なフィードバックを通して行う。

発表では、ダンス指導の熟練者と未熟練者の指導言語の背後にあるダンスの動きをみる観点と知識についての研究を事例に挙げた。この研究では、熟練指導者・未熟練指導者各4名を対象に、教材「新聞紙を使った表現」を取り上げ、指導者の働きかけの異なる2つの指導場面（指導者が新聞紙を操り学習者の多様な動きを引き出す場面と学習者相互に新聞紙を操り・真似た動きに対応して言葉をかけ評価する場面）に限定したダンスの指導実験を行い、指導実験後に指導者に対するインタビューを行った。その結果から、ダンスの「動きをみる観点」には、指導の場面に応じた動きの「誘発」と「強化」の2つの観点があることが示唆された。

学習者の動きを引き出す指導時に発揮される「動きを誘発する観点」では、未熟練指導者が「新聞紙の動き（形）を真似する動き」を促したのに対し、熟練指導者は「新聞紙の質感や変化等の特徴を捉えた動き」を引き出したことに、両者の顕著な違いがあった。つまり熟練指導者は、真似する対象を新聞紙の動きや形の特徴だけでなく、新聞紙の質感の特徴も含めた動きを引き出していた。言い換えれば、熟練者は新聞紙そのもの（素材）の特徴を理解した上で教材化していると考えられる。

学習者の動きを評価する指導時には、動きを評価すると同時に、指導者が学習者に学ばせたいと思う動きに変容させるための「動きを強化する観点」に力点が置かれていた。指導言語の意味を分類すると、

【①動きの質感、②大きく動く、③全身を使う、④空間の変化、⑤時間の変化、⑥力の変化、⑦動きの連続、⑧動きの種類、⑨個性的な動き、⑩なりきる】が動きを強化する観点として抽出でき、これらの観点には、取り扱う教材に限らない、ダンスを通して共通に学ばせたい内容が明確に存在していた。特に、未熟練指導者が可視化しやすい③④⑨の観点を中心に指導していたのに対し、熟練指導者は⑤⑥⑦の可視化しにくい「動きのメリハリ（緩急強弱）やひと流れの動き」の観点も含めた指導をしていた。つまり、熟練者は動きの目に見えにくい部分を含めた動きの指導が可能であるとともに、これらの観点を未熟練指導者が知ること、熟練に向けた指導ができるようになると推察される。

表現・創作ダンス、特に即興表現を指導する際には、学習者が自由に表現すること、個々の動きが多様であることを前提に、「動きをみる観点」をもって指導しなくてはならない。しかしその中でも、指導者自身が取り扱う教材の特徴をどう捉えるのかといった「教材解釈」の知識、教材に限定されない「ダンスを通して学ばせたい内容」の知識、そして双方が掛け合わさった「教材を通して学ばせたい動き」の知識を指導者がもつことにより、学習者の潜在的な動きを最大限に発揮させる指導ができると考える。



左から 中本浩揮氏 松尾知之氏 山崎朱音氏

傍聴記

筒井清次郎（愛知教育大学）

今回のシンポジウムは、個人的にもすごく興味が
あり、体育心理学専門領域のシンポジウムとしては、
ふさわしいテーマであったと思う。体育心理学専門
領域からの発表者も現在興味ある発表を発信し続け
ている中本先生（鹿屋体育大学）と、体育心理学領
域ではないもののスポーツ心理学会員であり、運動
学習研究会に所属されており、体育学会賞受賞の松
尾先生（大阪大学）なので、非常に楽しみにしてい
た。また、体育心理学外から体育科教育の山岸先生
（静岡大学）が、どのような観点から運動指導を捉
えられているかも非常に興味があつた。

中本先生の発表は、今までいくつか読んでいたの
で、それらをわかりやすくまとめてくれる発表と思
っていたが、全く新しい内容で発表されており、そ
の研究視点も非常に明確で、大変面白かった。実験
を行う前の先行研究の吟味と実験計画の立て方が綿
密であり、若い研究者にとって、良い指針になった
と思う。研究が常にスポーツ実践者の視点に基づい
ており、毎回研究が発展しており、今後の活躍をお
おいに期待したい。

松尾先生の発表は、長年かけて行われた研究の知
見とともに、そこに至るまでの難しさとそれを克服
してきた歩みなども含めて発表されていた。なか
なか研究における裏話を聞ける機会は多くないので、
今後、この手法を用いて研究をしていく研究者にと
って、非常に有益な情報であつたと思う。

山岸先生の発表は、ダンスにおける動きの引き出
し方に関する言語指導など、運動学習の研究と関連
するもので興味深かった。もっと、その部分を重点
的にお聞きしたかったが、その時間がそれほど長く
なく、指導場面における言語に的を絞った話と議論
をもっと長く聞けたら良かったというのが、個人的
な要望である。3人の発表者とも、自身の運動経験
及び運動指導経験に基づいて課題が設定されており、
体育学会体育心理学専門領域のシンポジウムとして

は非常にふさわしかったと思う。今後も、このよう
なテーマで、シンポジウムが行われることを期待し
たい。

座長報告

東山明子（畿央大学）

8月22日（水）東海大学1号館において学会初日の口頭発表が3教室で行われ、A-202教室にて午前10時半から11時50分までの3題の口頭発表の座長を務めさせていただいた。この3題は「身体表現の共創に関する研究」の一連の共同研究であったため、それぞれの演者から15分間ずつ発表をいただいた後、35分の質疑応答を設ける形で進められた。

最初の発表は東洋英和女学院大学の西洋子先生による「その1：手合わせ表現における共振と出会いについて」である。援助者としての発表者の臨床的実践事例ビデオ映像をもとに、身体での出会いと共振を現象論的に検討しようとするものであった。援助者と被援助者がそれぞれの主体性を保ちつつもひとつの表現を創り合う共同性が発現するときに共振感覚が創出されるのであり、そのプロセスは他者との出会いと同時に新たな自己との出会いでもあるといった内容の報告がなされた。

2番目の発表は早稲田大学の渡辺貴文先生による「その2：身体の二重性に着目した共振創出プロセスの計測」である。共同研究者である西先生が実践する「手合わせ表現」における共振創出プロセスを、「手合わせ」の部分のみを抽出して椅子座位姿勢で機器を間に手合わせした二者の身体動作の計測によって工学的に捉えようとするものであった。てのひらの動作に先んじて身体の潜在的な働きが存在すること、また、その働きを高める手段としてゆらぎに注目し、弱いゆらぎ負荷の呈示により身体表現共創のためのつながりが生まれる可能性を示唆するものであった。

3題目の発表は早稲田大学の三輪敬之先生による「その3：表現の持続性創出とカオス性について」である。共振の持続に必要なイメージを伴う表現を共に生み出すダイナミクスに関する知見を得るため、表現の共創において合わせたてのひらの前後運動周期の時系列変化に着目し、共振状態ではゆっくりし

たリズムが無意識のうちに自己組織化されていること、さらにてのひらの位置の変化にローレンツカオスとみなせる構造が存在すること等が報告された。これら一連の研究発表から、身体表現の共創におけるプロセスやそこから実践者が感じることを客観的に明らかにすることの難しさや奥深さを強く感じると同時に、発表者たちの研究の視点は独創的であり、結果の解釈の仕方の斬新さとともにその探求姿勢が非常に印象深かった。これまでどちらかといえば感覚的主観的に語られてきた身体表現の共創を、工学的手法を用いて科学的に把握しようとする意欲的な一連の研究発表であり、今後のさらなる発展が期待される。

3題の発表のあとの質疑応答では、フロアから活発な質問やコメントが出され、工学的手法に関する専門的な意見や得られた結果の解釈等について、意見交換が行われた。身体表現の共創や共振に座長は不案内であったため専門的な議論についていくのに必死で、議論をまとめ切れなかったのが申し訳なかった。とはいうものの、「生きていること」は科学的思考様式のモノの世界でありが「生きていくこと」は物語的思考様式のコトの世界であり、身体表現の共創は少し先の未来を共に創り出し「共に生きていくこと」であるとの哲学的な世界観へと広がりのある議論がなされ、発表者とフロアのみなさまのおかげで中身の濃い興味深いひとときを共有できた有意義な80分間であった。

座長報告

佐々木万丈（日本女子体育大学）

筆者は、大会第1日目、口頭発表2の座長を務めた。当日は、東海大学キャンパス内の木々から蝉の鳴き声が賑やかに聞こえる、午前中の暑い時刻の開始であったが、フロアには30名から40名ほどの参加者がみられた。

本セッションでは、3演題の発表があった。それぞれ15分ずつの発表の後に、全体での質疑応答が35分間設定された。

松竹貴大氏（大阪体育大学大学院）ほか3名による発表は、試合前に相手の情報を得るために用いられる「スカウティング映像」の視聴が、運動イメージ想起中の生理的および心理的指標にどのような影響を及ぼすのかを検討するものであった。サッカー選手を対象とした分析結果からは、映像を視聴した選手は視聴していない選手よりも運動イメージ想起中の自律神経系の反応が増加し、課題の出来映えやイメージされる筋運動の感覚なども高いことが明らかになったことが報告された。

次に、亀井誠生氏（立命館大学）の発表は、スポーツの試合結果に強く影響していると考えられる、いわゆる「調子の善し悪し」とはどのように捉えられるものなのかを、精神生理学的指標である脳波と自作のイメージ尺度を用いて検討するという内容であった。競技レベルの高いラケット競技選手を対象として調子に関するイメージと脳波との関係を分析・検討した結果からは、調子の良さと α 波との関連が示唆されたことが報告された。

次に、手塚洋介氏（大阪体育大学）の発表は、音楽聴取の有無が運動実施に伴うポジティブ感情の喚起に差をもたらすかどうかを検討するものであった。3分間のウォーキングに対して音楽聴取群と非聴取群を設定し、感情尺度得点のプレ・ポストを比較した結果からは、聴取群が非聴取群に比べて運動実施直後の肯定的感情が向上していたことが報告された。

以上の発表後、まず、演者に対して発表に関する補足説明を伺い、それらを受けてフロアとの質疑応答に入った。質疑応答では、いずれの研究に対して

も指標として用いられた事項の定義を確認する質問（例：亀井氏への質問として、調子の良し悪しと正負の感情との関係など）や、条件設定を確認する質問（例：手塚氏への質問として、音楽聴取群の音楽内容はどのようにコントロールされたのかなど）がみられた。各演者は、それぞれに質問された事柄に対して適宜応答をされていたが、改めて変数や条件の設定における定義の重要性を認識させられた。

最後に、司会者として3氏に対する質問をそれぞれさせて頂いた。松竹氏にはスカウティング映像に対する選手の認知的評価の違いが測定指標の変化に与える影響について、亀井氏には「調子」を説明する場合の多義性の整理をいかに行うかということについて、手塚氏にはポジティブ感情が何に伴うものなのかの特定をいかに行うかという点についてであった。3氏からは、それぞれの研究の今後の発展という視点も含めてお答えを頂いた。

ところで、会場には演者席が設定されていなかったため、質疑応答では演者がその都度マイクのある演壇まで移動していた。演者がフロアと対面し意見交換ができるような会場設定が望ましいと感じた。



佐々木万丈氏

座長報告

兄井 彰（福岡教育大学）

大会初日（8月22日）の午前中の口頭発表で、3つの演題の座長を担当しました。この3演題は、相互の関連は少なかったために、個別に報告いたします。

1演題目は、兵庫教育大学大学院連合の升本絢也先生による「二人は一人より力発揮もタイミングも安定する」でした。発表の内容は、個人間の力発揮が個人内の力発揮よりも力とタイミングの制御が安定するかについて検討したものでした。片手で最大随意収縮の10%と5%という小さな力発揮を周期的に繰り返す課題では、二人は一人より力とタイミング制御も安定することを示す大変興味深い内容でした。特に、二人の力の総和を視覚情報で提示した場合、個人間課題は個人内課題よりも力とタイミングの変動が少なく安定することを見だし、単純な運動において二人で行う方が運動制御にとって有効であることを示した有意義な研究だと感じました。

2演題目は、大阪体育大学大学院の星川麻里子先生による「東大式エゴグラムからみたテニス競技におけるダブルスペアの相性」でした。発表の内容は、テニス競技のダブルスペアについて、相性が良いペアと相性が悪いペアを東大式エゴグラムの得点の重なりで検討するというものでした。相性の良いとするペアは、相性が悪いとされるペアよりもAC得点の重なりが少ないことから、互いに遠慮することなくプレーできることが、相性の良いペアの特徴であると考察されていました。テニスやバドミントンなどのダブルス競技では、ペアを組む相手によって、競技成績が大きく左右されると考えるため、このような研究は重要だと考えられます。また、今後、良い競技成績を残しているダブルスペアはどのような相性であるかを検討することでより研究が発展するのではと感じました。

3演題目は、立命館大学の福村真耶子先生による「運動部位への触角の付加が運動学習効果に与える

影響」でした。発表の内容は、肘の屈曲運動の力量調整だけでボールの到達距離を調整する課題を学習する際に、実験者が被験者の上腕に触れる触角条件を付加する影響にていて、検討したものでした。実験により、運動課題における学習効果は、触覚を付加した条件でのみ認められ、学習の早い段階から成績の改善が見られてことを明らかにしています。運動を学習する際に、単に他者が運動部位に触れることが学習に有効に働くという可能性を示して点で大変興味深く発表を聞くことができました。今後、なぜ運動部位への触覚刺激が学習を改善させるかについて明らかできれば指導現場でも役立つと感じました。

今回の口頭発表は3演題が終了後、全体の質疑応答が行われましたが、3演題に関連する事柄がほとんど無く、座長の力不足から質問や意見等がバラバラに行われ、まとまりのないものになってしまい、申し訳ありません。今後、関連性が少ない演題で構成されるセッションでは、1演題ごとに質疑応答を行うなどの工夫をしてみても良いのではないかと思います。

最後になりましたが、フロアの先生方の示唆に富む質問や意見と若手発表者の真摯な姿勢に感謝いたします。ありがとうございました。

座長報告

豊田則成（びわこ成蹊スポーツ大学）

本セッションの終了直後に、あの甲子園では大阪桐蔭高校が春夏連覇の偉業を達成し、感動の連戦に幕を閉じたことが強く記憶に残りました。

会場となりました東海大学のキャンパスは広大で、とても暑いく、木陰で汗を拭う先生方が散見されました。そして、私は口頭発表 4 の座長を拝命し、演者の先生の日頃のお取り組みを間近でお聞きする機会を頂戴しました。

暑かったのは気候ばかりではありません。口頭発表会場においても白熱したディスカッションが展開されました。まずトップバッターの菅生貴之先生（大阪体育大学）は「学生アスリートの慢性的ストレスによる起床時コルチゾール反応-練習後と休養後およびオフシーズンの比較検討-」、次の平田勝士先生（大阪体育大学大学院）は「試合に向かう大学生陸上競技アスリートのストレス変化-起床時コルチゾール反応を用いて-」、そして、山田泰行先生（名古屋市立大学大学院）は「大学生競技者の訴えるバーンアウト症状のリスク推定」、最後の田部井祐介先生（筑波大学大学院）は「青年期のサッカー選手におけるバーンアウトとその誘発要因」という演題で、それぞれご発表いただきました。その後の質疑応答では、手塚先生（大阪体育大学）や三宅先生（東京国際大学）の積極的なご質問やご意見をお聞きすることで、私を含めたフロアの皆さんも大変勉強になったことに他ありません。また、演者の先生方が他の先生方の取り組みに強い関心を持たれ、最前列の壇上で白熱した議論が展開されました。司会である私の力量不足もあり、演者の先生方には過分のご配慮を頂戴しましたことをお詫び申し上げます。

ここでは、質疑応答の様子を振り返ってみたいと思います。まず、菅生先生のご発表はとても聡明で丁寧なご発表であったと感じております。コルチゾールについて何ら知識を持ち合わせていない私にと

って非常にわかりやすく、多くの可能性を感じるご発表となりました。一方、演者の先生方とのディスカッションを展開され、新たなチャレンジに向けて有益なディスカッションを展開されていたことが印象に残りました。また、平田先生のご発表はスポーツ現場に直結する有意味な知見をご提供いただきました。大学生陸上競技アスリートが試合に向けて取り組む中で、試合本番の 1 週間前にとてもデリケートな心情になっていることをご指摘されました。ご自身が指導される中で感じておられる課題を生理心理学を背景に解決されようとしている姿勢に感銘すら覚えました。続く山田先生のご発表は、とても緻密な計画の下バーンアウトの構成概念を追証され、有益な知見をご提供いただきました。質疑応答の際も、山田先生が積極的に他の演者に対してご質問されていたことが印象的でした。そして、田部井先生のご発表では、ご自身のサッカー経験から抱かれるに至った素朴な疑問に端を発し、緻密な研究を遂行されていることを窺い知ることができました。

本セッションは、「菅生先生・平田先生」と「山田先生・田部井先生」、すなわち、「コルチゾール」と「バーンアウト」といった 2 部構成のようでありました。しかしながら、その背景には、アスリートの「ストレス対処」といった共通のテーマが見え隠れしておりました。先にも触れましたが、壇上の先生方が活発な意見交換をされており、有意義なセッションとなりました。私自身もとても勉強になりました。ありがとうございました。

座長報告

伊藤豊彦（島根大学教育学部）

8月23日（木）9時30分から行われた体育心理学専門領域口頭発表第5セッションの報告をさせていただきます。本セッションでは4題の発表がそれぞれ15分行われ、その後質疑応答を含んだ討議が40分という予定で行われました。概略は、以下の通りです。

まず、パソコンの不具合により、5分遅れでスタートした1題目は、日比千里先生（早稲田大学大学院）による「スポーツの試合における円陣行動の実態」というテーマでの発表でした。本研究では、試合場面でよく観察される円陣行動に焦点を当て、その実態を明らかにするため、大学スポーツ競技者244名を対象に行った調査結果の報告が主たる内容でした。

円陣を組む選手が83%に上ること、円陣の形態は「肩を組む・腕を背中にまわす」が44%を占めること、試合前に組まれることが多いこと、などが報告されるとともに、種目別や性別からみた円陣行動の実態が報告されました。討議におけるフロアーからの質問にもあったように、円陣行動の効果をどのようにとらえるのか、また、円陣を組みたくないと思っている選手の特徴把握など、今後の進展が待たれる発表でした。

2題目、水野基樹先生（順天堂大学大学院）は、「大学生スポーツチームにおけるチームビルディングの導入とその効果の検討Ⅰ—内省報告を分析対象とした定性的調査の視点から—」という演題で発表されました。本発表では、大学生野球部員を対象に、組織開発の専門家によって作成されたプログラムを2日間実施したチームビルディング（TB）の効果を選手の内省報告によって検討したものでした。

TBの実施方法についての質問に対してフォローアップの必要性が演者から指摘された点が重要と思われますが、スポーツ用のプログラムやチームの状況に応じたTBの開発の必要性、効果測定における心理的測度の導入など、今後の展開が期待される発表でした。

3題目は、筒井 香先生（奈良女子大学大学院）による「スポーツ競技場面における思考とパフォーマンスとの関連—高校男子サッカー選手への半構造化面接に基づいて—」という発表でした。

個人特性や競技特性を考慮したポジティブシンキングの方法を明らかにするために、2名の高校サッカー選手を対象に半構造化面接を実施し、選手の個人特性、すなわち、他者評価への意識と特性不安を考慮したプログラムの必要性を指摘する内容でした。2名という対象の少なさ、他の（重要と思われる）

個人特性の存在の可能性など、検討すべき課題が残されているように思われますが、個々の選手に特化したプログラムの必要性の指摘は重要であり、今後の展開が期待されます。

本セッション最後の4題目は、辰巳智則先生（畿央大学教育学部）が「スポー競技者の傷害リハビリテーション過程における対処行動の実態と競技復帰後の適応との関連—時間的展望FB-FFモデルの観点からみた分析—」という題目で発表されました。

負傷を経験した大学生124名を対象に、過去・現在・未来の時間的展望を測定する尺度を作成し、明らかになった3つのタイプ、すなわちポジティブ連鎖、ニュートラル連鎖、およびネガティブ連鎖の対処行動や適応との関連を検討したもので、過去の負傷経験を否定的にとらえ、現在も問題の渦中にあり、未来も否定的にとらえるネガティブ連鎖タイプの対処行動や適応が不適切であったことから、傷害リハビリテーションにおける過去—現在—未来の内的な繋がりを統合的に保つという時間的展望の重要性を指摘する内容でした。今後は、傷害リハビリテーションにおいて、時間的展望連鎖タイプに応じた介入研究が実施されることが期待されます。

以上、発表いただきました4人の先生方とこのセッションに参加いただいたフロアの皆様、並びに東海大学のスタッフの皆様の協力に厚くお礼申し上げます。座長の報告とさせていただきます。ご協力、ありがとうございます。



伊藤豊彦氏

座長報告

上野耕平（鳥取大学）

私が座長を担当させて頂きました口頭発表6は体育学会2日目、8月23日午前に行われました。ここでは、4名の先生方によるご発表とフロアの先生方との質疑応答の概略につきまして報告致します。

まず最初の発表題目は、「中学校柔道授業が生徒の心理社会的スキルに与える影響の検討-柔道授業における「態度」評価尺度作成を通じて」であり、発表者は近畿医療福祉大学の山本浩二先生でした。山本先生は本年度から中学体育授業において必修化された武道の一種目である「柔道」に注目し、柔道の体育授業への参加を通じて「授業への積極性」や「相手の尊重」、「礼儀作法」などがどの程度向上するのかを評価するための尺度作成についてご発表されました。

続いて、兵庫教育大学大学院の島本好平先生から、「大学1年生における競技活動を通じたライフスキル獲得レベルの経時的変化」と題する研究についてご発表頂きました。島本先生は「スポーツ活動への参加を通じたライフスキルの獲得」というテーマに取り組むに辺り、一時点でのデータの取得に止まらず縦断的に検討する必要性を唱えられておりました。そして研究成果においても、高度なスポーツ活動への参加を通じて、いくつかのライフスキルに向上が認められたことを示唆する結果を提示されました。

次に、近畿大学経営学部教養・基礎教育部門の津田忠雄先生から、「基礎演習と大学生アスリート-ライフスキル教育プログラムの基礎的研究」についてご発表頂きました。津田先生は大学運動部員を対象として実施された「ライフスキル教育プログラム」の成果についてご報告されました。そして大学運動部員の現状について、スポーツを通じて学んだ内容を日常生活に般化させる一方で、日常生活で求められる内容をスポーツ活動に落とし込む指導の必要性について主張されていました。

最後に、千葉県香取市立佐原小学校の高橋清孝先

生より「体育心理学の知見を生かした小学校体育授業の効果-「体育における学習意欲向上のためのガイドライン」の有効性の検討」と題するご発表を頂きました。高橋先生は多くの授業実践を通じて、児童の学習意欲向上を導くガイドラインを作成された上で、そのガイドラインを用いた授業の有効性について、対照群を設けた上で丁寧に検討されておられました。高橋先生の実践につきましても、具体的などのような内容を実践されたのかなど、授業実践への応用を意図した熱心なご質問がフロアから寄せられました。

質疑応答では、各先生方のご発表に対して多数のご質問が寄せられました。そのなかで中心となったのは、スポーツ参加者のスポーツ場面での行動と日常生活場面での行動の差異に関するものでした。ライフスキルへの般化を導く指導に限らず、どのような要因がそこに存在しているのかについて、今後多方面から検討が必要であると感じました。

フロアからの質問が相次いだことで座長に係るプレッシャーは少なかったのですが、適切な声かけができれば、一つ一つの質問についてもっと議論を深めることができたのではないかと反省しております。ただ今回の座長の経験は、自らの研究を振り返る良い機会となりました。このような機会を頂き、大変ありがとうございました。

演者報告

竹内竜也（鹿屋体育大学）

夏真っ盛り、力強い生命力を感じさせるセミの鳴き声を聞きながら体育学会第63回大会は、東海大学で開催された。学部生の頃、試合でよく来ていた地にこの様な形でまた来られることになるとは考えもしていなかったし、再び来られたという嬉しさもあったが、試合の時に来た時とはまた違った緊張感を感じていた。

今回のポスター発表では、「スポーツにおける負の連鎖と非意図的な動作模倣の関係」について報告させて頂いた。発表前、誰も来てくれなかったらどうしよう等と考えていたのは、自身が初めての学会への参加ということもあり、ポスター発表とはいえ少し緊張していたからだろう。不安とは裏腹に沢山の先生や院生の方々が聞きに来てくれた。自分の報告を聞きに来て下さった先生や他大学の院生の方々に、自身の研究の大まかな概要を説明した後、ディスカッションの時間を多少ではあるが得ることが出来た。その中で、自分一人では見えてこなかった研究に対する課題や問題点などを多数指摘して頂き、本当に自分自身にとって収穫の多い学会になった。その中でも、「面白い」というお褒めの言葉を頂いたことが非常に嬉しかったし、他分野の友人も複数聞きに来てくれ嬉しかった。

自身が発表しておらず、専門分野の口頭発表等と時間がかぶっていない時は、積極的に専門分野のみならず、他分野の先生や院生の方々の発表を聞いて回った。体育学会は多領域で演題も多く沢山学ばせてもらった。自分の専門領域を深めるのも良いことであるが、他領域の方々とも情報交換をすることができ、貴重な場となった。多方面の方々の発表を見ると、色々な箇所に様々な工夫が施しており、次の発表の時に取り入れてみようと感じた所が多々あった。

今回の発表を通して、貴重なご意見やご指摘を受けられたことは、自分一人の力では到底出来なかつ

た。練習感覚ではあったが、事前に何度も発表練習に付き合ってくれた先生方や同じゼミ内の先輩・同級生の力添えがなかったら、しっかりと質問に対して受け答えも出来ず、今回の様なご意見等ももらえなかっただろう。本当に感謝しても感謝しきれない。自分の研究には、今回の発表を通してまだまだ課題も修正点も多く残されていることが分かった。今回指摘された箇所をしっかりと埋めていき、結果を出すことが、日頃からご指導を受けている先生方や院生の方々に対する唯一の恩返しだと感じた。最後になってしまいましたが、今回この様な形で演者報告という貴重な体験をさせて頂いたことに深く感謝しています。

演者報告

小川千里（近畿大学経営学部）

「もうこれで最後にしよう」この研究に関する発表についてはそう決意して臨んだ。私は大会最終日のポスターセッションの最終ナンバーに発表の場を与えていただいた。プログラムのこんな端っこまでチェックしている関係者はどのくらいおられるのかわからなかったもので、当日ポスターに触れに来てくださった方がおられたら本当にありがたいと思っていた。大げさだが、有終の美を飾るのにふさわしいと感じていた。発表前、会場に向かう道すがら、研究対象となったワークでの三時間と発表までのやり取りを、せっかくだから思い返していた。

本研究は、大学生アスリートが就職活動用の自己PRを作成する際に、自己に関する価値観を心の奥底に持っているにもかかわらず、それを言語化できないもどかしさを当事者が感じている、そんな様子に出会ったのがきっかけで始まった。呼びかけに応じた三人の競技経験者に、私がガイドを担当させていただいた。

TAEメソッドによる自己PR作成支援では、参加者が二つの「みじめな出来事から這い上がった経験」を語り、それぞれの長所（TAEではパターンと呼んでいる）を見出す。そして、その二つを「交差する（一方からもう一方を見て、見えてくるものを出してみる）」という独特なプロセスを歩む。特に交差の際には、当事者が内的な価値観として持っているかもしれない言葉を、ガイドや他のメンバーが当事者に投げかけて、それを聞いた当事者が「身体の感じ」でじっくりくるかどうかにより、自分で自分の価値観を表すのにピッタリな言葉を選んでいく。普段から競技で「身体を通じて」自分らしさや感情を表現するのが得意な大学生アスリートにとって、この方法による自己PRの作成は、薄っぺらではなく一貫性があり、自分の心の中の海底に錨をしっかりとかけて「本当の自分とは何か」に向き合い、活字にするものであった。

一方の私は、パターン化や交差の際に、当事者が「うーん」と身体の感覚に問いかけて内界に入っていく時間、その人の内界という海と一緒に潜っていた感覚になる。そして、ジャストフィットした言葉が飛んできて、「はっ!」と当事者の身体に急速に血がめぐるような瞬間を見るときは、チャート上に何かの位置が分かったという感覚と一緒に体感する。大学生アスリートの心の中を一緒に、水温38度くらいの温かさで泳がせていただける、本当にかげえのない3時間だった。最後となるに恵まれすぎるほどの事例だった。

そもそも最後にすると決めたのは、TAEメソッドがシステム上実施に労力がかかりすぎることがある。つまり、システムに対する私の人間的な弱さが原因である。

発表の日、そんな私に対してある殊勝な参加者が来られた。「交差っていうところ、もう一度言ってもらえませんか?」「共通点とは違うのですか?」と言われた瞬間、ものすごく説明したい気持ちで燃えてきた。大学生アスリートが見て理解ができ、実践的貢献を最優先にした研究をしていて「どうして辞めるのか」という感情が湧きあがってきた。なぜこんなことになるのか。

本研究の発表に当たり、機会を設けてくださった日本体育学会の諸先生方、本研究を経済的に支援してくださった皆様、新たな葛藤を引き起こしてくださった参加者の先生、そしてこのワークに勇気をもって取り組んでくださった大学生アスリートの皆様に心から感謝申し上げる。

大会参加記

小谷克彦（北海道教育大学）

東海大学において行われた第63回日本体育学会は、私にとって「あつさ」との戦いでした。まず、北海道に住む私にとって、夏の本州の「暑さ」が最初の敵でした。羽田空港に降り立った時は、まだそれほど北海道との違いを感じませんでしたが、東海大学前駅に着いた時に「蒸し暑さ」にやられました。東海大学周辺の坂道が、私の敗戦をさらに決定づけたことは言うまでもありません。しかしながら、気温は北海道とさほど変わらないはずが、体感温度が違う。湿度によってこうも変わるのかということを今更ながら学びました。あと、大学に冷房設備があるというありがたさと妬ましさも感じざるを得ませんでした。

大会会場に着き、まず西洋子先生（東洋英和女学院大学）をはじめとする「身体表現の共創に関する研究」の発表を聞かせて頂きました。発表された先生方の「熱い」思い、そしてフロアの先生方との「厚い」やり取りを目の前に、改めて研究の楽しさを思い出させて頂きました。と同時に、その議論に加われない現在の自分の状態を痛感させられました。西先生の現場での体験、実感を渡辺貴文先生（早稲田大学理工学術院）と三輪敬之先生（早稲田大学理工学術院）が自然科学の方法で研究に落とし込んでおられました。西先生の体験、実感は言葉にならないことだと思います。ですが、渡辺先生と三輪先生はそれを言葉にしようという取り組みをされていました。私の頭の中でも西先生のお話から、色々な連想や妄想が膨らんではいましたが、それらをいかにして説明することができるのかという段階でうようよとしていました。つまり、言葉にする方法論がないということを言い訳にして、私は妄想する段階で留まっているということだと思います。もっと勉強をしなければいけないとお叱りをうけているような感覚を抱きました。

そして、立谷泰久先生（国立スポーツ科学センタ

ー）のキーノートレクチャー1（ロンドンオリンピックに向けたJISSの心理サポートの取り組み）では、心理サポートをする我々にとって、「自身にとって心理サポートとは何か？」という根本的な部分をしっかりと見つめることの大切さを改めて考えさせられました。また杉山佳生先生（九州大学）のキーノートレクチャー2（体育・スポーツと心理社会的スキル教育）では、杉山先生のこれまでの取り組みを丁寧に発表して下さいました。先生の取り組みは、ただ単に研究を積み上げていくのではなく、「何が問題なのか？」「何が大切なのか？」を絶えず自問自答しながら取り組まれているように感じました。そのような視点は研究をする上で大切であると同時に、続けていくにつれて見失いやすいものだと思います。そういった意味でも、研究を一つひとつ積み重ねていくことの大切さと難しさを学ばせて頂きました。

最後に、北海道に赴いてから、スポーツ心理学について色々な方々と議論をする機会が極端に少なくなりました。そこで、このような学会で色々な先生方と出会い、刺激を与え合い、そして夜な夜な話を深めることが私にとって「篤い」時間であることに改めて気づきました。

このような様々な「あつさ」に討たれつつも、頂いた刺激を大切に、北海道のあらゆる「さむさ」に負けずに研究活動に取り組もうというエネルギーを頂けた学会でした。

Ⅱ．研究会の活動報告

スポーツ社会心理学研究会 活動報告

杉山佳生（九州大学）

ここ数年、勇んで報告できるような活動は行っていないですが、チームワークや集団（集会的）効力感などの社会心理学的概念が、体育・スポーツ領域において改めて注目されてきていることから、研究会としても何かしなければということで、平成24年11月の金沢での日本スポーツ心理学会の際に、久しぶりにメンバーが直接顔を合わせる打ち合わせ会を企画しました。とはいっても、大会前後にメンバーの都合がつく日時を設定することが難しかったので、大会中の昼休みに食事をしながらという形にしました。それでも、数名のメンバーおよび社会心理学研究に関心のある先生方と、今後の活動について、意見交換をすることができました。

検討テーマは2つ、書籍の出版と例会の開催でした。出版については、2006年に「体育教師のための心理学」を翻訳出版してしばらく経ったということで、新たに翻訳をしようという提案と、独自に執筆しようという提案が出されました。翻訳については、体育・スポーツの社会心理学に関するもので、かつ、ある程度の販売が期待されるような、新しい良書がなかなか見つからず、具体化されるには、今しばらく時間がかかりそうですが、前向きに考えていこうということになりました。いっぽうで、翻訳ではなく、社会心理学の本を執筆してしまおうという提案もありました（事務局からの提案ですが）。雑誌「体育の科学」で、社会心理学のテーマの一つとも言える「非言語的コミュニケーション」の特集が組まれ、また、体育学会でも、「心理社会的スキル」に関するキーノートレクチャーが行われたり、チーム力にかかるシンポジウムが企画されたりしていることから、スポーツ社会心理学系テーマに特化した1冊の専門書あるいはテキストを出版すべき時機が来ていると、個人的には考えています。出版には多くの先生方のご協力が必要となりそうですが、近いうちに実現させたいと思っていますので、皆さんの

力をお貸し下さい。

例会については、研究会単独では長く開催していないため、例年3月に行われている九州スポーツ心理学会の前後に開催できないか、検討してみました。結果的には、平成24年度は、多くのメンバーの都合がつかず、開催には至りませんでした。事務局としては、なんとかしていきたいと思っています。開催が決定した際には、ご参加のほど、よろしくお願いいたします。

ともかく、いくぶん停滞気味であった体育・スポーツ社会心理学研究の復興の機運に合わせて、研究会活動も、少しずつ盛り上げていければと考えています。メンバーの募集も随時行っておりますので、関心のある方は、下記までご連絡いただければ幸いです。

お問い合わせ先：

スポーツ社会心理学研究会事務局

杉山佳生

九州大学大学院人間環境学研究院

人間科学部門健康・スポーツ科学講座

sugiyama@ihs.kyushu-u.ac.jp

メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会 活動報告

高妻容一（東海大学）

この研究会は、国際メンタルトレーニング学会と国際応用スポーツ心理学会をモデルに、1994年にスタートし、現場での実践を目的とした情報交換会を全国各地で開催している。スポーツ心理学の研究に関しては、日本体育学会体育心理学専門分科会や日本スポーツ心理学会を中心として発表や情報交換をする場がある。最近は、スポーツ心理学会スポーツメンタルトレーニング指導士資格認定委員会や資格を取得した専門家で組織するスポーツメンタルトレーニング指導士会でのフォーラムや資格認定講習会が毎年、各地で開催されている。しかし、ここには、大学の研究者を中心とした集まりであり、現場での実践や現場の指導者や選手がほとんど参加しない現状がある。

そこで、本研究会は、現場の指導者や選手を対象に、スポーツメンタルトレーニング指導士が情報の提供をし、選手や指導者が現場で実践してもらい、その結果をまた研究会で報告するという理論（研究）と実践（現場）のキャッチボールを目的としている。

2012年度は、東海大学研究会が毎週1回、関東地区、静岡県、愛知県、栃木県、秋田県の各研究会が毎月1回の開催をしている。残念ながら、北海道、沖縄、福井、長崎研究会が休止中となっている。また研究会のメンバーがアトランタで開催された国際応用スポーツ心理学会に8名が参加し、世界的な情報の収集をし、その報告を研究会で行った。たとえば、コールマン・グリフィス・レクチャー（基調講演）では、この学会の会長でもあったイギリスのバーミンガム大学のジョン・デューダ博士が「スポーツ心理学・運動心理学の理論そして研究と現場での実践」というタイトルで、研究と現場での実践の統合をもう一度考え直すべきだという内容で講演をした。さらに、①失敗から成功へ：何をどうしたら失敗を成功へ活かせるのか？②向上の心理学：勝ち

続けるチャンピオンを作るためのコーチの展望、③一般的な健康研究と実践における運動心理学、④プロとしての教育：大学院で最低限の知識や経験を学ぶ、⑤招待国際ショナルシンポジウム：いろんな国のことを学ぼう・各国の取り組み、⑥スポーツ心理学コンシル：世界各国の各組織の代表が集まり情報を交換、⑦コーチ教育におけるスポーツ心理学の動向、⑧金メダルパートナーシップ：向上を維持するためのコツ（元アメリカ（USA）女子サッカー代表監督と元メンタルトレーニングコーチの講演）⑨エリートトップチームのコミュニケーション研究、⑩アメリカ陸軍の体力強化に対するパフォーマンス心理学を使ったモデル、⑪プロフェッショナルスポーツにおける適応プロセス：研究から応用へ、⑫ソーシャル心理学キーノート：スポーツのポジティブな発展：子供の活動的な心、⑬メンタルトレーニングの道具：ビデオを活用したイメージのサポート、⑭トップレベルトレーニングにおける若いスウェーデン人選手とアメリカオリンピック選手のトランジション、⑮コーチングの向上：効果的コーチング、⑯招待したパフォーマンス心理学インタビュー：トップレベル選手を招待して、メンタル面について話を聞く、メジャーリーガー、NFLプレイヤー、水泳オリンピック金メダルなどのシンポジウムなどが行われたことを映像も交えながら報告し、約50ページにまとめた内容を数回に分けて、報告すると同時にその内容をディスカッションした。このような学会で取り上げられた内容を現場でどう応用するかという形式で研究会は開催されている。

運動学習研究会 活動報告

門田浩二（大阪大学）

平成24年度の運動学習研究会は6月16、17日に大阪大学豊中キャンパスにおいて開催されました。昨年とは異なり1泊2日の短い会期でしたが、会場へのアクセスの良さも手伝ってか参加者61名、発表演題27と昨年を超える大盛況となりました。盛りだくさんの発表のため、本会の最大の特徴ともいえるフロアとの深い議論を可能とする長めの発表時間が確保できず、やや残念な面もありました。しかしながら、発表時間外にも熱意あふれる議論が参加者間で繰り広げられており、参加者の方々の意識の高さを再確認できる良い機会となったのはうれしい誤算でした。今年は特に初参加の方が多く見受けられ、新しい視点・観点からの発言も多く、本会の新しい流れが生まれつつあるようにも感じられました。発表内容は相変わらず基礎的な心理物理実験からスポーツ・リハビリテーションの現場での応用やパフォーマンスを分析したものまで多種多様でしたが、どの研究も「人間の動き」にきっちりと軸足を据えられていました。まさにここが本会の参加者の共通の興味の焦点であり、参加者の専門領域や種目の違いを跨っても建設的な議論を可能としている礎となっています。

最近の研究の特徴は分析方法の変化に現れているようです。古典的な運動学習研究では、学習スケジュールなどの介入方法の違いがパフォーマンスに及ぼす影響を検討したものが多く見受けられていました。その後、動作解析システムの普及により、パフォーマンスの変化の原因を身体運動の変化から描写的に捉えようとする試みが急速に普及しました。そして最近ではコンピュータの演算能力・記憶容量の劇的な進歩によって、数年前では考えられなかった量のデータを容易に扱えるようになりました。それに伴い、動作解析から得られる大量の時系列データの処理も比較的容易になり、全身運動や複数人のモーションキャプチャデータを多試行に渡り解析した

報告も増えてきました。これにより条件や被験者群の違いをよりクリアに表現することが可能となり、より現場の動きに迫ることができてきています。また、データの分析方法もより洗練されてきており、1対1の対人関係だけでなく多人数間の動きの特性を同時に捉えようとしたもの、学習期間を通して動作の変化を時系列で表現したものなど、これまで手が出しづらかった現象も研究対象として利用されるようになってきたようです。

その反面、研究者の（そして現場における実践者の）抱く疑問・問題点は、過去数10年を振り返ってみても変わらない部分も多いように思われます。技術革新による手法の変化・分析の簡便化はあたかも研究を一気に推し進めるように期待してしまいがちですが、それをどのように使いこなすかは利用者次第、といったところなのでしょうか。もちろんブレイクスルーが容易に開けるとは思いませんが、今こそより素朴な現場の視線が重要になっているように思えてなりません。できるだけ沢山の多種多様な眼をあわせて身体運動の制御や学習の本質を見つめることで、新たな発見に繋がることを期待してしまいます。このテーマに向かって、明るく激しく議論できる方々が集える場を提供し続ける研究会をこれからも目指せたらと考えております。来年度（平成25年度）の運動学習研究会の場所、日程は未定ですが、決定次第本会のホームページ（下記）で告知いたします。興味を持っていただけたら、是非、お越し下さい。お待ちしております。

運動学習研究会ホームページ

<http://www.htc.nagoya-u.ac.jp/~yamamoto/jmls/>

臨床スポーツ心理研究会 活動報告

松本香奈（岐阜女子大学）

第63回日本体育学会（於：東海大学）の開催期間中に、第21回臨床スポーツ心理研究会が開催されました。発表者は中込四郎先生（筑波大学）、指定討論者は鈴木壯先生（岐阜大学）、司会は竹之内隆志先生（名古屋大学）でした。

通常の事例検討会では、臨床経験者もしくは学修者のみが参加します。しかし、この会はより広く参加者を募っており（参加者43名）、初めに中込先生からこの会の発端と臨床事例の取扱い等についてお話がありました。会の発端は、学会大会の発表だけでは十分に語り議論ができない相談事例について、時間をかけて一つの事例を報告し、検討し、理解を深めていくことを目指し、1991年の富山大学での大会からであったとのことでした。このような経緯、歴史のある会に参加させていただいていると思うと、改めて気が引き締まる思いでした。

事例の内容は、「スランプに陥ったアスリートの相談」でした。相談者は学生アスリートで、小学生のころからナショナルチームに入っており、オリンピックも経験していました。翌年のオリンピックを目指していましたが、「2年前から成績の伸びがなくなり、自信もどんどんなくなっている」と、以前のようなパフォーマンスができなくなっていること、自分の記録が破られたことから大きくなってきた不安等を訴えていました。相談当初は、それまでの技術にこだわりがあったり、コーチへの依存が強かったりして、自分への自信のなさもうかがえました。途中からは、競技を「やらされている」のではなく、自分がどうしたいのか、ということを考えながら将来も見据えて競技に取り組んでいました。最後は競技引退後についても考えながら生活のすべてをかけて競技に取り組み、卒業後もトレーニングを続けているとのことでした。

面接を通して、これまでの自身の競技に対する考え方や家族との関わり（「家族の大切さ」）を振り返

り、現状を受け止めて（認めて）今できることを「精いっぱい」やろうとしていく過程を読み取ることができました。途中、体調不良や怪我等の身体症状もみられましたが、それを機会として技術面等の課題と向き合うことができたのではないかと感じました。

この事例のように、最初スランプ等を訴えて来談したアスリートに対してメンタルトレーニングを実施する場合もありますが、それだけではその背景にあるアスリートの課題に対応することが難しくなります。この事例ではカウンセリングにおいて相談者の訴えを傾聴し、その中で相談者が自らの課題に取り組んでいく過程に寄り添っていたことで、“自立”へと歩みだせたのではないかと思います。

現在、学生の養成・指導を行っている立場として、学生の話に傾聴すること、学生自身が課題に向き合い取り組んでいく過程に寄り添うことの大切さを再確認することができました。

スポーツ動機づけ研究会 活動報告

渋谷崇行（新潟県立大学）

スポーツ動機づけ研究会は2003年から年1回のペースで定期的開催されるようになりました。そして、2012年12月15日（土）・16日（日）には、節目となる第10回目の研究会が開催されました。会場は名古屋大学東山キャンパス内の野依記念学術交流会館です。この施設は2001年に当時、名古屋大学物質科学国際研究センター長であった野依良治先生が、ノーベル化学賞を受賞されたのを記念して整備されたということです。緑と隣接するとても落ち着いた雰囲気が漂うこの会場に32名の会員が参集し、例年にも増した活発な議論が繰り広げられました。

今回の研究会の目玉は、「スポーツ動機づけ研究の将来を語る！」と題する10周年記念特別シンポジウムが開催されたことでした。名古屋大学の西田保先生による司会のもと、演者の方々からは様々な立場や視点から話題提供があり、その後の議論では、参加者全員で意見交換が交わされました。スポーツ動機づけ研究の過去・現在と未来をつなぐ内容のシンポジウムで、参加者のそれぞれが今後の研究や実践につながる多くのヒントを得たようでした。この他にも、一般発表とラウンド・テーブル・ディスカッションが行われ、記念シンポジウムと同様に活発な意見交換が交わされました。

研究会は参加者間の知的交流を大切にしていますので、自由な雰囲気の中であつという間に時間は流れていきます。毎回の参加で感じるの、もう少し時間をかけて、あるテーマについてじっくり議論することができないかということです。そこで、2013年の研究会は、北の大地、北海道で、例年より1日多い3日間の日程で開催することになりました。このように、新しいことにも挑戦する好奇心旺盛な研究会です。動機づけに興味をお持ちであれば、是非、研究会に参加してみませんか。お待ちしております。

◆10周年記念特別シンポジウム「スポーツ動機づけ研究の将来を語る！」司会：西田 保

「これまでの動機づけ研究を振り返って」西田 保（名古屋大学）

「動機づけの測定から」養内 豊（北星学園大学）

「理論的研究の立場から」伊藤豊彦（島根大学）

「体育学習の立場から」長谷川悦示（筑波大学）

「文化間比較の立場から」磯貝浩久（九州工業大学）

「質的研究の立場から」北村勝朗（東北大学）

「最近の動機づけ研究から」藤田 勉（鹿児島大学）

◆ラウンド・テーブル・ディスカッション「動機づけ研究の成果を現場に活かすー介入実践の課題を考えるー」司会：渋谷崇行

「チームビルディングを目的としたチームスタッフへの介入実践」永尾雄一（国立スポーツ科学センター）

「大学女子サッカー部のチームビルディングの実践」長谷川望（愛知東邦大学）

◆一般発表

「水泳・水中運動の恩恵と負担は行動変容段階によって質的に異なるのか？」西田順一（群馬大学）

「中学校体育授業時の動機づけ雰囲気による運動有能感への影響ー原因帰属様式を媒介とした検討ー」田島芳隆（群馬大学大学院）

「ラグビーに必要な心理的要因とは？」養内 豊（北星学園大学）

「スポーツへの情熱に関する研究」藤田 勉（鹿児島大学）

「エキスパートスポーツ選手の中学生期についての考察」齊藤 茂（松本大学）

研究会に興味をお持ちの方や参加をご希望される方は、下記までご連絡下さい。

西田 保先生

052-789-3952, nishida@htc.nagoya-u.ac.jp

Ⅲ. 研究室紹介

研究室紹介 九州工業大学大学院生命体工学研究科 行動認知心理学講座

磯貝浩久（九州工業大学）

はじめに

九州工業大学は、実業家安川敬一郎氏によって1907年に設立された明治専門学校を前身とする、百年を超える歴史を持つ国立大学です。炭坑王とも呼ばれていた安川氏は、「国家によって得た利益は国家のために使うべき」との信念のもと技術者養成のため巨額の私財を投じたとされています。「技術に堪能なる士君子」の養成が建学の精神で、現在の教育理念でもあります。1949年に北九州市戸畑区に九州工業大学として設置された時は、工学部だけの単科大学でした。その後、1986年に飯塚市に情報工学部、2000年に北九州市若松区に生命体工学研究科を設置し、今は2学部3研究科となり、3つのキャンパスを有するようになりました。学生数は、学部と大学院を合わせると約6000名です。知名度は決して高くはないものの、マスコミが公表する就職ランキングで全国ベストテンに入るなど、就職の良さは高く評価されているようです。

研究室の特徴

私は、情報工学研究院の人間科学講座教員として、学部では情報工学部の授業を担当しています。大学院では、生命体工学研究科脳情報専攻の行動認知心理学講座（協力講座）の教員として勤務しています。そのため、研究室に来る卒研生は情報工学部の人間科学講座に所属することになり、修士課程の学生や博士課程の学生は行動認知心理学講座に所属することになるといった、少し複雑な関係になります。また、2つのキャンパスに研究室と実験室がありますが、キャンパスが車で1時間程の距離にあるため、恵まれているようでもあり不便でもあります。

これまでに私の研究室に入った学生は、博士課程では仲里清（九州共立大学）、下園博信（九州共立大学）、兄井彰（福岡教育大学）、今村律子（元福岡大学）、秋山大輔（日本経済大学）、萩原悟一（ア

カンソー州立大修士修了）の6名います。全員がスポーツ心理学を中心としたスポーツ科学を専門とする人たちになります。また、多くが現役の大学の先生という特徴もあります。今回の会報にも掲載されている仲里清氏が、私のもとでの最初の学位取得者になりますが、現在は他の人たちも審査に入るなど学位に挑戦しているところです。修士課程には4名（山中、迫田、古門、長）、卒研生として9名受け入れてきましたが彼（彼女）らは全て情報工学部の出身です。このように、博士はスポーツ科学、修士・卒研は工学を背景としたメンバーになっています。共通するのは、スポーツを行なうのも研究するのも好きということだと思います。そのことに関係しますが、大学では体育会系の研究室として知られています。今年度は博士課程3名、修士課程3名、卒研生3名の9名が研究室に在籍しています。今年度の研究室の目標として、査読付き論文10編以上の採択を掲げて、皆で切磋琢磨しています。



＜写真1：研究室のメンバー＞

研究室の研究内容

行動認知心理学講座として位置づけられる私の研究室では、「運動行動など人間の様々な行動について、認知及び情動と行動の相互関連を明らかにして、人間の行動のメカニズムの解明や行動を説明するた

めのモデルを構築するための教育研究を行う」ことをうたっています。研究テーマは、卒研を含め自分の興味関心をもとに自己決定することになっていますが、体育心理の研究の仕方としては当然のように思われるこのようなやり方も、工学系では珍しいようで学生も肯定的に捉えてくれています。

博士課程の学生の主な研究テーマは、「野球における視覚情報獲得」、「状況判断に関わる認知的トレーニングシステムの構築」、「錯視のメカニズム」、「周辺視と運動制御の関連」、「剣道の視覚探索と情動の関係」、「ソーシャルサポートとスポーツコミットメントの関係」となっています。博士の学生は教員が多いため、これまでの研究キャリアを基にしたテーマ設定であり、多くは実験的研究手法を用いているという特徴があります。修士及び卒研生の主なテーマは、「有酸素運動の認知機能への影響」、「プレッシャー下における全身協応運動」、「サッカーの知識構造とプレー記憶の関係」、「テニス選手の視覚探索」、「スポーツにおける自己・他者志向的動機」などです。やはり、実験的なアプローチが多いようです。

全体としては視覚に関する研究が多いのですが、研究室には動体視力などのスポーツビジョンを測定する装置があることや、眼球運動を測定する器具を福岡大学から借用できることも関係していると思います。また、大学には光トポグラフィーという脳血流量を計測する装置があり、手軽に利用できるため、研究によっては積極的に活用しています。

コラボ研究への参加

研究室では、学生は自分の研究だけでなく、様々なコラボ研究に積極的に関わることにしています。今年度は私が代表の科研（他者との関係性を基軸としたスポーツ動機づけモデル）、名大の西田保先生の科研（スポーツの効果と般化のモデル構築）、九工大の堀尾先生の科研（関係データの解析手法の確立）という3つの科研プロジェクトがありますが、学生にはこれらの研究内容を理解するとともに、何らかの役割を持ってもらうようにしています。また

民間企業からの受託研究として、スポーツビジョンに関する研究と波動スピーカーの効果に関する研究があり、これらの研究に関しては中心的な役割を担ってもらうようにしています。さらに、九工大は研究室間の敷居が低いということもあり、他の研究室と共同で「自己組織化マップ（SOM）を用いたスポーツ行動の解明」や「セイバーメトリクスを用いたパフォーマンスの予測」などスポーツ行動に対して工学的な接近を試みていて、定期的に研究会を行っています。このような研究会にも学生の参加を呼びかけています。



＜写真2：ホークス戦観戦＞

研究室のイベント

研究室の主なイベントとして、春は新歓とホークス戦観戦、夏はゼミ旅行、秋は大学院の運動会への参加（サッカー等での優勝をノルマ）、冬は忘年会などがあります。また、院生には様々な学会で発表することを、卒研生にも3月に行なわれる九州スポーツ心理学会で発表することを課しています。

最後に、博士の学生は現職の先生や研究機関への就職を希望する学生であり、研究活動がそのまま活かされますが、修士学生や卒研生は、工学の知識をもとに様々な企業に就職していて、研究室での活動

が直接的に活かされるわけではありません。そのような学生にとっても、有用な研究テーマを設置し先行研究を調べ仮説やモデルを設定すること、妥当な方法論や結果の導き方を身につけること、合理的な考察を行うことなど、研究を通した論理的思考や活動は必ず有用になると期待しています。



<写真3：壱岐へのゼミ旅行>

IV. 学位論文紹介

野球における視覚情報獲得に関する研究

仲里 清（九州共立大学）

学位：博士（学術）授与機関：九州工業大学

取得日：2012年12月31日 指導教員：磯貝浩久 教授

研究背景

野球競技者にとって、環境の変化を正確に捉えるための視覚情報が重要となる。この視覚情報を効率よく、すなわち目的達成のために必要な情報をより短時間で正確に獲得する方略を身につけることが、競技において成功する鍵となる。本論文の目的は、野球の視覚情報獲得について、熟練者と非熟練者の視覚探索を比較・検討していくことによって明らかにすることである。そのため、野球の捕球動作時及び投球動作時の視覚探索方略について検討した。

スポーツにおける視覚情報獲得に関する研究を概観し、スポーツ競技者の熟練スキルにおける視覚探索の特徴について考察した。その結果、熟練者は迅速かつ正確に注視対象に反応し、より少ない対象に対してより長い時間注視しており、より効率的な視覚探索方略と有効な視覚手がかりを利用して対戦相手の動きを予測する能力に優れていることが明らかとなった。このように、優れたパフォーマンスを発揮する熟練者は、状況に応じて適切な視覚探索方略を用いて情報を獲得し、より適切な状況判断を行っていると考えられた。一方で、野球の捕球動作時や投球動作時の視覚探索については十分な研究が行われていないことが文献レビューから示された。

研究目的

1. 野球の捕球動作時に、打者に関する視覚及び聴覚情報に制限（マスキング）を加えた場合の条件を設定し、熟練者と未熟練者のパフォーマンスを比較・検討することにより、外野手のフライ捕球動作の特性について明らかにする。
2. 実践的な場面での投球動作からプロ投手と学生投手の視覚探索活動とその意識について検討し、投手にとって有効な視覚探索ストラテジー及びその意識について明らかにすることを目的とする。

外野手のフライ捕球時における視覚情報処理

野球の競技場面を想定した外野手のフライ捕球動作において、打者に関する視覚及び聴覚情報に制限を加えた場合、熟練者と非熟練者のパフォーマンス

にどのような違いが生じるのかを検討することにより、外野手のフライ捕球動作における知覚探索の方略について明らかにすることを目的とした。その結果、野球の捕球動作においては打者の視覚情報が重要であり、熟練者は非熟練者よりも初動が速いことが明らかとなった。また、熟練者は打球時に得られる情報を手がかりに動作をいち早く開始してボールの落下点に入るが、非熟練者はより遅い段階で打球の行方を判断して動き出していることが明らかとなった。すなわち、熟練者はボール落下地点をあらかじめ予測し、初動作を早く開始することでボールまでの到達時間に余裕を持ち、飛んでくるボールまでの空間距離を予測しながら落下地点まで移動することによって、キャッチングの成功率を高めていると考えられた。

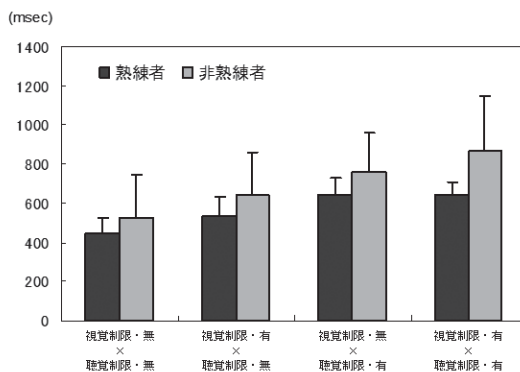
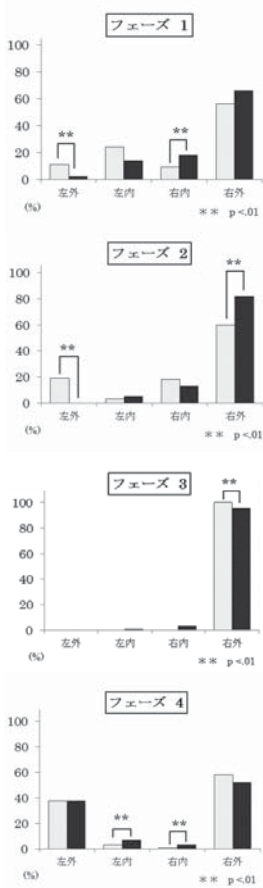


図1. 各条件における動作開始時間

野球投手の投球動作時における視覚探索方略

野球の投球動作中に投手がどのような視覚探索を行っているかを明らかにするために、プロ野球投手とアマチュア大学野球投手を対象として、アイマーカーレコーダーを用いた眼球運動計測実験を行った。野球の投球動作時の視覚探索について、投球動作開始前のグローブを静止する時点を経験点として、投球動作時間を4つのフェーズに分割し検討した。その結果、投手は投球動作開始前後の早い段階ではバッターズボックス内に比較的多くの視線を配置させ、投球動作後半ではセットポジションからの投球で自

然と視線が向く方向に視線を配置し、捕手や打者といった投げ込むべき標的を中心視で捉えるのではなく、周辺視で捉えようとしていることが明らかとなった。また、熟練者は平均注視時間が長く、投球動作開始前後の早い段階にかけて投球動作時に自然と視線を向ける方向とは逆の側に視線を配置する割合が多いといった、特徴的な視覚探索方略が認められた。



†) 左外：左外領域，左内：左内領域，右内：右内領域，右外：右外領域

図2. 各フェーズにおけるプロ投手と学生投手における各空間に対する視線の平均配置割合

総括

野球の捕球動作においては打者の視覚情報が重要であり、熟練者は非熟練者よりも初動が速いことが明らかとなった。捕球の成功率は熟練者と未熟練者の間に差があり、打者が打席に入り打撃の瞬間までの打球情報（方向、距離、音）から予測していると

考えられる。また、捕球動作開始の動き出しが早く、ゆとりをもって落下地点に到達していることから確実な捕球が行われていることが示唆された。つまり、熟練者は打球時に得られる情報を手がかりに動作をいち早く開始してボールの落下点に入るが、非熟練者はより遅い段階で打球の行方を判断して動き出していることが明らかとなった。

野球の投球動作時の視覚探索について検討した結果、投手は投球動作開始前後の早い段階ではバッターズボックス内（左右内領域）に比較的多くの視線を配置させ、投球動作後半ではセットポジションからの投球で自然と視線が向く方向に視線を配置し、捕手や打者といった投げ込むべき標的を中心視で捉えるのではなく、周辺視で捉えようとしていることが明らかとなった。また、熟練者は平均注視時間が長く、投球動作開始前後の早い段階にかけて投球動作時に自然と視線を向ける方向とは逆の側に視線を配置する割合が多いといった特徴的な視覚探索活動が見られた。

スポーツの実戦場面への示唆

熟練した投手は視覚対象を注視せず、特有の視覚探索方略を用いて情報を獲得していることも明らかとなった。野球においては打球動作や捕球動作だけでなく投球動作においても熟練者が目を切っていることから、コーチングにおいても「ボールから目を離すな」といった指導は注意が必要だと考えられる。見ることが情報を得るということがうかがえたが、打者周辺すべての情報が試合展開への意識につながっていることは、新たな発見であると思われる。野球のように高速のボールを視覚対象とする場合は、特定の場所に注意を向けて中心視で対象を捉えるのではなく、適切な所に視線を移動させながら周辺視も活用しながら視覚探索するスキルが重要だと考えられる。

しかし、近年の研究 (Spering et al., 2011) では「ボールから目を離すな (Keep your eyes on the ball)」という視覚探索スキルの有効性も検証されていることから、今後どのように中心視と周辺視を使い分ける方が有効であるかを検証し、スポーツの実戦場面で活用可能な視覚情報獲得スキルを明らかにしていく必要があろう。

スポーツチームにおけるチームパフォーマンス予測モデルの研究

河津慶太（福岡市スポーツ協会）

学位：博士（人間環境学） 授与機関：九州大学人間環境学府

取得日：2012年12月31日 指導教員：杉山佳生 准教授

【研究の背景と目的】

スポーツ心理学の分野において、スポーツチームのパフォーマンスを予測する試みは様々な視点から行われている。本研究においては、特にチームワークに着目して、スポーツチームにおけるチームパフォーマンス予測モデルを構築することとした。

スポーツチームを対象としたチームワークに関する研究は、これまでも数多くなされているが、チームワークそのものを明確に定義し、その関連概念間の関係をみた研究は少ない。そこで、予測モデルの構築に先立ち、チームワークの定義を確認し、対象とする関連概念の選定を行った。

山口（2008）によれば、チームワークには行動的側面と心理的側面が含まれる。また、池田（2009）は、チームワークの行動的側面として「チームパフォーマンスの統制管理」、「チームの円滑な対人関係」を、心理的側面として「集団効力感」、「チームメンタルモデル」、「集団凝集性」を挙げている。このような先行研究での議論を踏まえて、スポーツチームのチームパフォーマンスに影響すると考えられる、チームワークの構成概念を選定した。それらは、組織市民行動、チームメンタルモデル、集団効力感である。組織市民行動は、メンバーが任意に行うチームのための行動で、チームワークの行動的側面を表す概念であり、本研究では、「試合外での行動」と「試合中の行動」に分けられた。チームメンタルモデルは、チーム戦術やメンバーの能力に関しての、メンバーの共通理解を表す。集団効力感は、メンバーが認知する、チーム全体に関しての効力感である。後者の2つの概念は、チームワークの心理的側面を表している。

本論文では、これらのチームワーク下位概念を含んだチームパフォーマンス予測の仮説モデル（図1）を設定し、モデルに含まれる概念間の関係や、それらの概念とチームパフォーマンスとの関係の分

析を通して、仮説モデルの妥当性を検証することを目的とした。

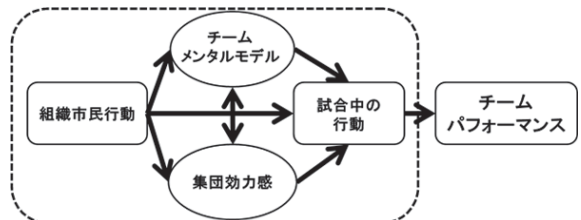


図1. スポーツチームにおけるチームパフォーマンス予測の仮説モデル

注）チームパフォーマンス以外では楕円がチームワークの心理的側面、四角が行動的側面を表している。本論文では点線で囲われている部分をチームワークと考える

【結果の概要】

1) 第1章研究1では、「スポーツチームにおける組織市民行動尺度」が作成され（図2），その信頼性と妥当性が確認された。第1章研究2では、「スポーツチームのチームメンタルモデル尺度」が作成され（図3），信頼性と妥当性が確認された。第1章研究3では、既存の集団効力感尺度（Short et al., 2005）の短縮版が作成され（図4），信頼性と妥当性が確認された。

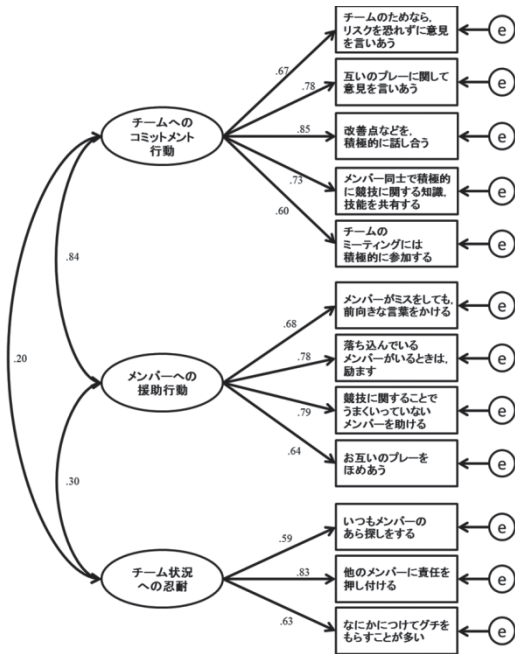


図2. 組織市民行動尺度の検証的因子分析結果

注) 「e」は誤差変数を表す

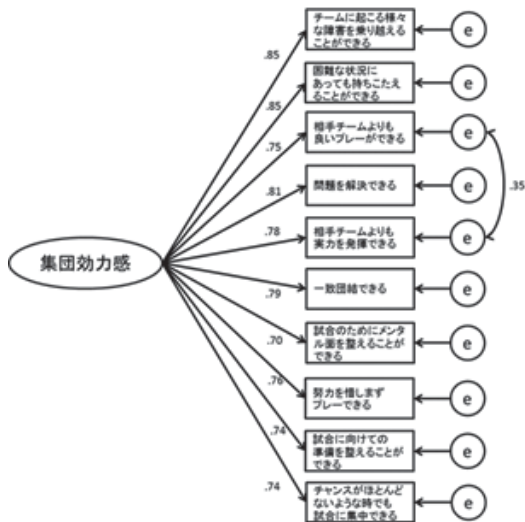


図3. チームメンタルモデル尺度の検証的因子分析結果

注) 「e」は誤差変数を表す

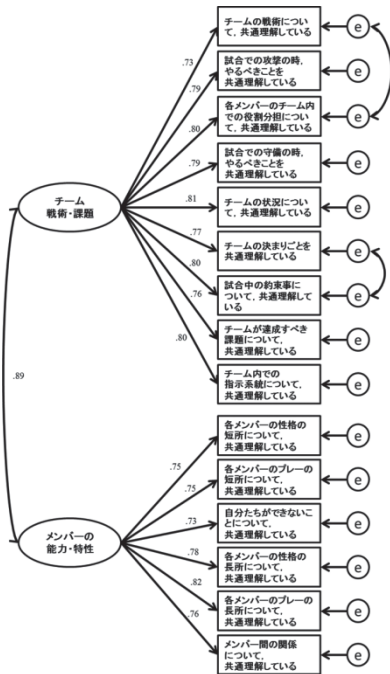


図4. 集団効力感尺度の検証的因子分析結果

注) 「e」は誤差変数を表す

2) 「チームメンタルモデル (チーム戦術・課題, メンバーの能力・特性) は, 試合中の行動を介して, チームパフォーマンスに影響を及ぼす。」という仮説の妥当性を検証した. その結果, チームメンタルモデルは試合中の行動とチームパフォーマンスの双方に影響を及ぼしており, また, 試合中の行動からチームパフォーマンスへの影響もみられ, 仮説の妥当性が示された (図5). (第2章研究1)

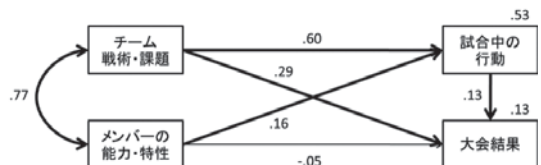


図5. 集団効力感, 試合中の行動および大会結果間のパス解析結果

注) すべてのパス係数は5%水準で有意である

3) 「集団効力感は, 試合中の行動を介して, チームパフォーマンスに影響を及ぼす。」という仮説の妥当性を検証した. その結果, 集団効力感は試合中の

行動とチームパフォーマンスの双方に影響を及ぼしていたが、集団効力感が試合中の行動を介してパフォーマンスに影響するという、仮説どおりの関係は認められなかった（図6）。（第2章研究2）

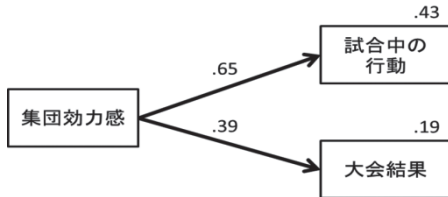


図6．集団効力感、試合中の行動および大会結果間のパス解析結果

注) すべてのパス係数は5%水準で有意である

4)「組織市民行動（コミットメント、援助行動、チーム状況への忍耐）は、チームメンタルモデルおよび集団効力感に影響を及ぼし、チームメンタルモデルと集団効力感は、相互に関係し合っている。」という仮説の妥当性を検証した。その結果、これらの関係性が確認され、仮説の妥当性が示された（図7）。（第2章研究3）

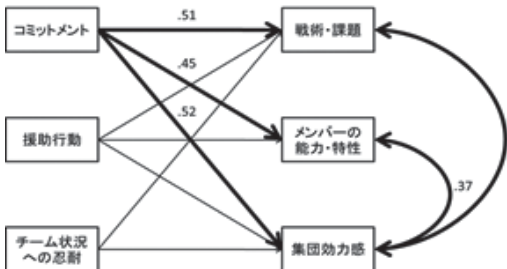


図7．組織市民行動、チームメンタルモデルの下位尺度および集団効力感間のパス解析結果

注) すべてのパス係数は1%水準で有意である

5) 2)～4)の結果を統合した仮説モデルの妥当性を、チームをサンプルとしたデータと、個人をサンプルとしたデータをもちいて検証した。その結果、どちらのデータでも、組織市民行動がチームメンタルモデルおよび集団効力感に、チームメンタルモデルが試合中の行動に、集団効力感がチームパフォーマンスにそれぞれ影響を及ぼすという一連のプロセスが確認された。一方で、試合中の行動からチームパフォーマンスへの影響はみられず、仮説モデルの一部

については、その妥当性は認められなかった（図8）。（第2章研究4）

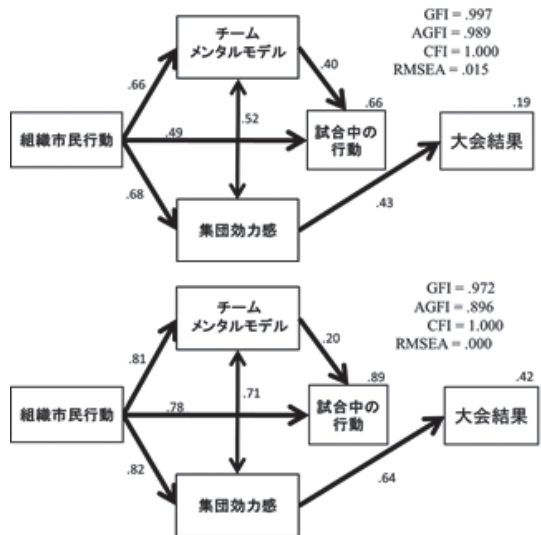


図8．チームパフォーマンス予測の仮説モデルのパス解析結果

注) 上が個人をサンプルにしたもの、下がチームをサンプルにしたもの。すべてのパス係数は1%水準で有意である

【まとめ】

本研究の結果から、チームメンタルモデルや集団効力感を高めることによってチームパフォーマンスを向上させられる可能性が示された。また、組織市民行動に代表される、メンバーの任意的な行動が、チームメンタルモデルや集団効力感などの向上につながっていく可能性が示唆された。

これまで、わが国において、スポーツチームのチームワークあるいはパフォーマンスを向上させることを目的とした、チームビルディング介入がしばしば行われてきた。しかしながら、何を介入のターゲットとするのか、介入後の評価をどうするのかなどが曖昧であることが多く、これらを明確にしていくなが必要があった。本研究で得られた知見は、このような介入を行う際のターゲティングや評価をより明確なものとすることに貢献すると期待される。

【今後の課題】

1) 本研究において、「試合中の行動」は特性的な変数とみなされていたが、状態的な変数としてもとらえることができる。試合ごとの状態的な「試合中の行動」変数を用いれば、より現実的なチームパフォーマンス予測モデルを構築できる可能性がある。今後は、このような視点を導入して、予測モデルを発展させていく必要がある。

2) 本研究で検証された予測モデルの、実践場面における有用性を検討する必要がある。加えて、縦断的な研究や統制群を設けた実験的研究、準実験デザインを用いる研究などを実施し、予測モデル内の変数間の因果関係をより明確にしていくことも必要である。

【主要参考文献】

Bandura, A. (1997) Self-efficacy: the exercise of control. W. H. Freeman: New York.

Cannon-Bowers, J., Salas E, and Converse, S. (1993) Shared mental models in expert team decision making. In: N.J. Castellan, Jr. (Ed), Individual and group decision making: Current issues.

池田 浩 (2009) チームワークとリーダーシップ. 山口裕幸編 コンピテンシーとチーム・マネジメントの心理学. 朝倉書店: 東京, pp. 69-85.

Organ, D. W. (1988) Organizational citizenship behavior: The good soldier syndrome. Lexington Books: Lexington, MA.

山口裕幸 (2008) チームワークの心理学—よりよい集団づくりをめざして—. サイエンス社: 東京.

捕捉行為遂行中の運動修正メカニズムと運動修正能力向上のための新たな練習方法の提案

幾留沙智（鹿屋体育大学）

学位：博士（体育学） 授与機関：鹿屋体育大学

取得日：2013年3月25日 指導教員：森 司朗 教授

論文の概要

本論文は、周囲の環境変化によって誘発される運動結果の誤差の増大を最小限に留めるために遂行中の運動を変更することを意味する「運動修正」に焦点をあて、その実行メカニズムについて検討するとともに、運動修正能力を高めるための練習方法を提案することを目的としていた。打球運動を模した実験室課題を用いた4つの実験を通して検討した結果、以下の2つの結論が得られた。まず運動修正のメカニズムに関しては、補足運動野を介して事前に予測された運動結果と運動遂行時に実際に要求される運動結果の間のずれの検出を含む内部フィードバックループ（図）が貢献していることが明らかとなった。そして、運動修正能力の向上に関しては、本研究において新たに提案した次試行についての事前の予測の裏切りをもたらす試行間変化を含む「IT（Inter-trial：試行間）練習」が有効である可能性が示唆された。

第1章 序論

第1章では、運動修正に関連する領域の先行研究を概観した。打球に代表される捕捉行為を扱った研究では、移動標的（e.g., ボール）の速度や軌道が変化した場合にも、熟練選手は未熟練選手より有意に小さな誤差を示すことが報告されている（e.g., Runigo et al., 2005, 2010）。このように、環境変化に合わせた運動修正は選手の熟達を支える重要な要因であると考えられるが、この運動修正能力を高めるためにどのような練習を行うべきかについてはほとんど検討がなされておらず、それどころか、その実行メカニズムについても明確な解答が得られていない。そこで本論文では、正確な捕捉行為の遂行を可能にするために、捕捉行為遂行中の運動修正メカニズムを明らかにするとともに、その知見に基づいて、運動修正能力の向上を可能にする練習方法を提案するために以下に示す4つの実験を実施した。

第2章 本論

照準運動を扱った研究では、素早い腕の軌道の修正に対して、予め脳内で予測された運動結果を基に、実際に要求される運動結果とのずれを検出するという内部フィードバックループ（以下、内部FBループと略す：図参照）の貢献が報告されている（e.g., Sabes, 2000）。第1実験では、捕捉行為遂行中の運動修正に対してもこの内部FBループが貢献しているかどうか検討することで、運動修正の実行メカニズムを明らかにすることを目的とした。もし実際に貢献しているならば、運動結果の予測に関わる補足運動野（e.g., Makoshi et al., 2011）の働きを経頭蓋磁気刺激を用いて妨害した際、運動修正時のパフォーマンスが低下すると予想される。検討の結果、本実験の仮説は支持され、特に素早い（運動時間 < 500ms）捕捉行為遂行中の運動修正に対しては、内部FBループ（図）の貢献が大きいことが明らかとなった（第1節）。

第1実験において明らかにされた運動修正の実行メカニズムに基づくと、運動修正能力を向上させるためには、予測と実際の運動結果の比較照合・誤差検出プロセスを強化する必要があると考えられる。そこで第2実験では、運動修正能力を向上させる練習方法として試行間変化を含むIT練習を新たに提案し、その効果の検証を行った。IT練習では、2種類の定速標的（低速・高速）が不規則な順序されたため、練習中に実験参加者は事前に予測された運動結果と実際に要求されている運動結果を試行間で比較照合する必要があった。その結果、IT練習では移動標的の速度変化を直接経験しないにも関わらず、加速標的を直接練習した群と同様に、加速標的に対する時間的誤差を有意に減少させていた。これより、IT練習において試行間変化を経験することで、移動標的の速度変化に対する運動修正能力が向上する可能性が示唆された（第2節）。

第3実験では、IT練習の効果を更に詳細に検討するために、第2実験で用いた加速標的とは異なるタイミングで加速する標的、大幅に速度が加速する標的、および減速を含む標的に対するIT練習の転移効果について検証を行った。その結果、タイミングや速度の大きさに対しては優れた転移効果が示されたものの、減速標的に対しては転移効果が示されなかった。これより、IT練習の効果は、学習した速度変化の方向性に特異的である可能性が示された（第3節）。

最後に第4実験では、IT練習によって練習効果がもたらされるメカニズムを検証するために、IT練習における2種類の定速標的の呈示順序を操作し、練習効果の比較を行った。その結果、2種類の移動標的が不規則な順序で呈示される場合においてのみIT練習の効果が示され、規則的な順序で呈示された場合には効果はなかった。これより、IT練習に含まれる試行間変化が、予め予測した運動結果と実際に要求されている運動結果を試行間で比較照合し、それらの間のずれを検出するプロセスを強化することでIT練習の効果が得られる可能性が示唆された（第4節）。

第3章 総括論議

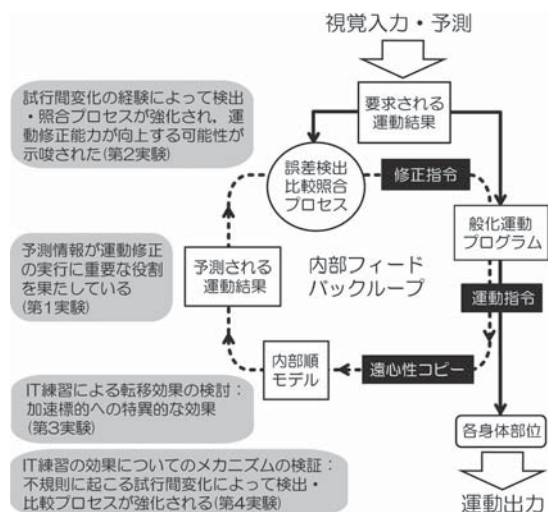
第3章では、以上4つの実験結果を基に総括論議を行った。捕捉行為遂行中の運動修正に対する内部FBループの貢献や移動標的の速度変化を直接的に経験しないIT練習の効果は、素早い運動修正に対して視覚情報の変化のみならず予測された感覚情報が貢献しているという近年の主張を支持するものであるといえる。しかしながら、IT練習の効果には加速標的に対する特異性が示された。これは、事前に予測する運動結果の違いによって加速方向に対する運動修正を特異的に経験していたことに起因している可能性が考えられる。この点については、今後更なる検証が必要であるといえる。

第4章 結論

以上より、捕捉行為遂行中の運動修正には、運動開始前に脳内で予測された運動結果と運動遂行中に実際に要求される運動結果の間のずれを検出すると

いう内部FBループが関与していることが明らかとなった。そして、事前に予測した運動結果と実際に要求される運動結果の間の乖離を引き起こす試行間変化を含む「IT練習」が運動修正能力の向上を可能にすることが示唆された。これらの知見は、時々刻々と変化する環境下での優れたパフォーマンス発揮が要求されるスポーツ選手の熟達を促進する重要な手がかりとなると考えられる。

付記：本論文の作成にあたり、森司朗先生は長きにわたり重要な疑問を投げかけ続けてくださり、中本浩揮先生は御自身の苦勞を厭わず懇切丁寧に向き合ってくださいました。また、諸先生方からは幾度となく貴重な御意見や暖かい励ましの言葉をいただきました。これらすべての御支援なくして本論文が完成することはありませんでした。この場をお借りして心より御礼申し上げます。



競技バトンのキャッチングにおける知覚運動行動に関する研究

高橋まどか

学位：博士（学術） 授与機関：東京工業大学社会理工学研究科

取得日：2013年3月31日 指導教員：石井源信 教授

バントワリングの選手は空中高くに投げ上げられた回転するバトンを正確にキャッチできる。回転するバトンのキャッチングはバントワリング競技の魅力のひとつである。“キャッチング”とは、飛来物体と身体部位または道具との衝突を制御して、ターゲットを補捉する行為として定義される。行動科学やスポーツ科学の研究分野では、飛来物体に対するキャッチング行動は、飛来物体に関する視覚情報の知覚と、これに基づいて予測した落下位置へ捕者自身が移動する運動行動が連動する、知覚-行為カップリングとして議論されてきた。これまでに、競技熟練者の知覚運動行動の特性を調べた研究や初心者の運動学習の過程や学習効果を検証する研究が数多く報告されてきたが、その大半がボールすなわち球体が投射物として利用されている。その中で近年、ボール以外の飛来物体に対するキャッチング課題における知覚運動行動の様式の違いや、運動学習とその効果についても学術的関心が高まっている。本論文は、競技バトンのキャッチング課題における知覚運動行動の様式について検討することを目的として、以下の6章から構成されている。

第1章「研究の背景と目的」では、スポーツ競技と学術研究の視点からキャッチングの位置づけについて概観し、人間工学や身体運動科学の分野における、キャッチングの知覚運動行動の特性と学習効果について検討した先行研究を概説している。また、バントワリングの競技特性と、身体運動科学の分野で利用が進む人工現実感（Virtual Reality, VR）システムについて概説している。先行研究で得られた知見に基づき、キャッチングにおける知覚運動行動の様式を検討する上での問題点を踏まえ、本論文の目的を明示している。すなわち本論文では、「熟練者の視線行動と運動行動」と「短期的な学習の効果」を明らかにし、さらに応用的研究として「バトンの回転が与える主観的印象」について検討することを

研究目的としている。

第2章「バトンのキャッチングにおける熟練者の視線行動」では、バントワリング熟練者の眼球運動を測定し、先行研究で検討されてきたボールと比較しながら、バトンのキャッチングにおける視線行動の特徴について検討している。視線解析の結果、ボールよりも早くバトンに視線が移動するものの、バトンの中心以外のエリアを視線が走査することを示している。また、バトンのリリースからキャッチまでの間にボールよりも短時間の追跡眼球運動が生じることを示している。バトンのキャッチングにおける視線行動は、ボールのキャッチングとは異なる特徴が明らかになったが、ボール課題と同様に、バトンの飛来情報や落下位置の予測判断に関与すると推察している。

第3章「バトンのキャッチングにおける運動行動」では、熟練者と初心者を被験者として、バトンのキャッチング課題遂行時の右手の反応時間を測定し、スキルレベルと運動行動の関係から、第2章で示した視線行動の結果と併せて、熟練者の手の反応タイミングの特徴について考察している。熟練者の反応時間は、リリース後およそ300msec後と、初心者よりも反応タイミングが遅いことが示された。熟練者は、バトンの飛来情報や落下位置を予測判断する視線行動と連動して、手の運動の時間的調整に関して最適化された時間でバトンキャッチするスキルを獲得していると考察している。

第4章「初心者における短期的な学習の効果」では、熟練者と初心者を被験者としたバトンのキャッチングの学習実験において、実験前後のパフォーマンスの変化から、初心者の短期的な学習による効果について検討している。学習初期は、初心者は失敗試技よりも接触試技が多いことから、バトンと手の到達位置を一致させる空間的調整ができることを示している。学習後期には成功試技が増加することから、

空間的調整に加えて、バトン タイミング良く把持する時間的調整を学習する過程にあると推測している。しかし、学習後期のパフォーマンスは熟練者と同水準に達しないことから、より長期的な学習の支援が必要であると考察している。

第5章「バトンの回転と立体呈示映像に関する主観的印象」では、飛来するバトンの飛行を没入型VRシステム環境下で立体呈示し、これに対して観察者が感じる現実感に関する主観的印象を評価している。VR環境を利用するにあたり、行動科学の分野において問題となる現実感に関する項目として、立体感、速度感、動力感、違和感に着目し、バトン映像の生態学的妥当性について検討している。主観的印象評価の結果から、ヴァーチャルバトンは回転することによって観察者に高い立体感と高い速度感をもたらすことを示している。また、バトン映像は立体呈示によって立体感と動力感が増すことを示し、現状のVRシステムにおいて立体呈示が効果的に機能することを示している。

第6章「総括」では、バトンのキャッチングにおける熟練者の視線行動と運動行動（第2、3章）および初心者 の短期的な学習効果（第4章）についての成果をまとめ、バトンが回転することにより、先行研究で検討されてきたボールとは異なる知覚運動行動の特徴がみられ、初心者 のキャッチングスキル獲得には長期的な学習が必要であることを本研究の主な結論として位置づけている。また、バトンの回転により変化する主観的印象（第5章）について成果をまとめ、VR環境下でバトン刺激の立体呈示が機能することを示し、当該領域における今後の研究の方向性に新たな示唆を与える結果を明らかにしている。

以上のように、本論文は競技バトンのキャッチングにおける知覚運動行動の特徴を明らかにするとともに、VR環境下で回転するバトンの立体呈示が現実感を与える映像として機能することを示している。その成果は、学術研究の発展ならびにスポーツ競技における指導に貢献すると期待される。今後は、VRシステムの利点を活かした学習支援の環境構築を進め、システムを利用した初心者 の運動学習について、

調べるものが課題として挙げられる。本論文の第4章で明らかになった実空間における学習効果と比較しながら、VR空間でのキャッチング学習の過程とその効果を検証し、実空間への学習転移についても十分に検証することが必要である。

V. 海外情報

スポーツ心理学をイギリスで学んで スポーツ心理学が現場に貢献できることー

片上絵梨子（イギリススポーツマス大学院）

夏にロンドンでオリンピックが開催されたイギリス国内において、2012年はスポーツに関する話題に多くの人の関心が寄せられた一年であった。特に五輪後はニュース番組や特集番組で様々な競技の選手が取り上げられ、またそれは選手に対するインタビューだけではなく、選手の所属クラブやコーチ、家族といった選手を支えた人々にも焦点が当てられた。それにより、選手の競技面だけでなく、練習環境や日常生活に関する話題が選手のパフォーマンスを作り上げている要素として紹介され、競技からだけでは知ることができない選手の一面を知るきっかけを与えてくれた。またその中で五輪という世界中が注目する4年に一度の大舞台での自身の競技やそれに至るまでの準備過程を振り返って、心理面がパフォーマンスに与える影響力に関するコメントが多く紹介されていたように思う。

ロンドン五輪の水泳400m、800m自由形銅メダリスト、Rebecca Adlingtonは19歳で北京五輪でメダルを獲得してからこれまでの4年間の中で、周囲からの期待によるプレッシャーや失敗することへの恐れに打ち勝たなければならなかったと振り返り、スポーツ心理学者とトレーニングすることにより、心理面の準備も行ってきたとインタビューで応えている。

「スポーツ心理学者の力を借りるということに躊躇する選手が多くいるが、私はそれを自分の弱さだとは思っていない」と心理面での弱さの克服により、選手として困難な時期を乗り越えてきたと語っている。それが多くの期待を背負いながらも、母国イギリスで開催された今回の五輪で、前回の五輪と同様に2つのメダルを獲得するという結果に大きく影響を与えたと言えるのではないだろうか。また、メダリストの心理面はBBC（英国放送協会）のスポーツ特集ビデオの中で「ゴールドマインドセット」としてその特徴や体験談を紹介され、その中で「成功したチームや選手、世界的に有名なコーチが行っていることをそのまま取り入れても、同じように効果的

に働くとは限らない。」と個人にとって意味があるものを探求していくこと、選手それぞれが独自の心理的準備を行うことの重要性が強調されている。

選手同様に選手をサポートする立場であるコーチも、選手の技術面だけではなく心理的側面を重要視する必要性を挙げている。ロンドン五輪7種競技の金メダリストJessica Ennisのコーチ、Toni Minichielloはロンドン五輪後、指導者としてのコーチの主な役割は「選手をサポートし、彼らの潜在能力を引き出すこと」とであるとし、素晴らしいコーチに求められる条件とは何かという問いに対して「多くの選手が経験する自分の競技能力に対する疑問を持つ時期（記録が伸び悩んだ時など）に、選手の才能を認め、エモーショナルサポートを提供することである。」と答えている。つまり、指導する立場に立つコーチは競技における有識者であるということに加えて、指導者として最も選手に影響力を持つという自覚を持ち、選手の理解者の役割を担い選手をサポートすることが求められるということである。

2012年イギリススポーツマス大学修士課程でスポーツ心理学を学んで、選手のレベルに限らず、様々なスポーツ現場において「選手への包括的なサポート」と「コーチのパフォーマンスに対するサポート」を考慮することの重要性を再認識した。まず、選手への包括的なサポートとして、競技面とwellbeing面が互いに影響することを理解し、競技力向上のみに着目するのではなく、選手が身体的、心理的に健康であるかというwellbeing面にまで視野を広げていくことが重要であると感じた。そのためには、「選手」であることはその個人にとって一側面であり、その他の側面（例えば、学生選手であれば“学生”としての個人）も含めて考慮すること、またその必要性を指導者に伝えて行くことが選手の必要としている事を見つけ出し、サポートすることの第一歩となるのではないだろうかと考えるように

なった。

2つ目に、スポーツにおいて「パフォーマンス」というと選手の競技のパフォーマンスが着目されがちであるが、コーチがいかに効果的な指導できるかということもまた「パフォーマンス」であるということである。選手が競技力向上のためにトレーニングをすることと同じように、コーチも常に向上心を持ってスキルを磨かなければならない。（例えば、選手のモチベーションや自信を高めるコミュニケーションや競技力向上に繋がる行動を促すことなどが指導者として実践できるか）コーチのパフォーマンスを高めるために、イギリスではスポーツ指導者資格の制度が設けられており、コーチのための指導法講習会や指導者育成プログラムも盛んに行われている。また様々なレベル（エリートアスリートアカデミーの指導者や大学生チームのコーチ）の現場で選手を指導する立場にある監督やコーチが大学機関（修士課程）でスポーツ心理学に関する最新の研究や実践例を学び、現場での指導に活かしている。競技に関する専門知識だけでなく、それを効果的に伝え、選手たちを導くというためのテクニックや知識の両方を兼ね備える「指導力」のある指導者を目指しているのである。

先ほどのJessicaのコーチ、Toniは「Jessicaはターゲットや目標を“与えられた選手”ではなく自分のゴールに辿り着いた“learner”である」とし、選手ーコーチの関係性は独立したものであるとインタビューを締め括っている。つまり、パフォーマンス向上の為の行動自体を提示することではなく、行動を選手が考え、行動を選択することへ導くことでコーチとしての役割を果たしているということである。このように独立した関係性の上でコーチが「パフォーマンス」することにより、選手の内発的な動機付け（競技自体が楽しいから競技をする、もっと上手になりたいと思う）、またそれによる選手の自発的な行動（自主練習を進んで行う、自分で技術改善に必要なことを考えるなど）に繋がり、最終的には必要以上の外的な要因の力を借りずとも、競技力向上に繋げることができるのではないだろうか。

指導者の自分の現役時代の成功や失敗の経験、または引退してから見えた視点を活かして、その競技における次世代の選手の育成に繋がりたいという気持ちが選手にとってポジティブな形で働く為には、選手ーコーチ間の独立した関係、それを支える環境づくりが求められるのではないかと感じた。

イギリスでスポーツ心理学のワークショップや実習の経験を通じて、トップレベルの選手だけでなく、その他様々なスポーツ現場でスポーツ心理学が幅広く実践されているということを肌で感じ、またスポーツ心理者として貢献できることの幅を拡げていく重要性を学んだ。様々なスポーツ環境、レベルやそのニーズに応じて、その現場に求められていることを追求していくことが、選手にとってまた指導者にとって競技に取り組みやすい環境づくりに役立つのではないだろうかと感じ、そのためにできることをスポーツ心理学的観点から探求して行きたいと思う。

VI. 日本体育学会第64回大会関連

日本体育学会第64回大会 体育心理学専門領域の企画

I. プレセミナー（企画委員会）

日本体育学会第64回大会は滋賀県草津市の立命館大学を会場として8月28日から30日の日程で開催されます。そこで、体育学会前日午後、体育心理学専門領域のプレセミナーを行います。プレセミナーでは、「これからの教育研究環境における体育心理学」のテーマのもと、体育心理学の展望を大いに語り、議論したいと思います。ぜひご参加ください。

日時 2013年8月27日（火） 15:00から17:00

会場 立命館大学くさつキャンパス エポック立命21

テーマ 「これからの教育研究環境における体育心理学」

話題提供者 佐久間春夫 先生（立命館大学 スポーツ健康科学部 教授）

参加費 無料

申込 事前に受け付けます。ただし、当日飛び込み参加も歓迎です。

事前申込期日 2013年8月27日（火）正午まで

事前申込先 a.higashiyama@kio.ac.jp まで

件名：「体育心理プレセミナー参加」

本文：「ご氏名、ご所属」を明記してください。

プログラム予定

14:30～ 受付

15:00～16:30 話題提供とディスカッション

16:30～17:00 スポーツ健康科学部研究実験施設見学ツアー

II. 学会大会（学会大会委員会）

○大会企画スケジュール

1日目：10:30-11:50 口頭発表

12:00-12:50 理事会

13:00-14:00 キーノートレクチャー1

14:10-15:40 ポスター発表

2日目：9:30-11:30 口頭発表

13:00-14:00 キーノートレクチャー2

3日目：9:30-11:30 シンポジウム

11:40-12:20 総会

13:20-14:50 ポスター発表

<シンポジウム>

テーマ：チーム力の育成

演者：松田 保（びわこ成蹊スポーツ大学）

コーチングの事例から

演者：遠藤俊郎（大東文化大学）

スポーツにおける「チーム力」とは？

演者：山浦一保（立命館大学）

“チーム力”をリーダーシップ研究における“関係性モデル”から考える

指定討論者：西田 保（名古屋大学）

「チーム力」に関する活発な議論に向けて！

司会：土屋裕睦（大阪体育大学）

<キーノートレクチャー1>

○演者：荒井弘和（法政大学）

演題：スポーツ基本計画を支えるスポーツ心理学

司会：磯貝浩久（九州工業大学）

<キーノートレクチャー2>

○演者：今中國泰（首都大学東京）

演題：知覚・認知と運動行動における無意識性・潜在性

司会：伊藤豊彦（島根大学）

VII. 事務局報告

2012年度 第2回体育心理学専門領域理事会 議事録

2012年（平成24年）8月22日（水）

場所 東海大学 湘南キャンパス 1号館3F（1M-305）

参加者 中込四郎（会長） 荒木雅信（理事長） 阿江美恵子 石井源信 磯貝浩久 伊藤豊彦
岡澤祥訓 佐々木万丈 菅生貴之 関矢寛史 手塚洋介 西田保 橋本公雄 山本裕二
松田有司

<挨拶>中込会長

体育心理学の体育学会における発表演題数が、体育方法の次に多い演題数。次期体育学会の副会長に阿江先生が就任。体育心理学専門領域が果たす役割も大きいといえる。

<報告事項>

荒木理事長より下記の報告があった。

1. プレセミナーが8月21日に行われ、好評の後に終了をした。
2. 日本体育学会大63回大会における専門領域の活動
発表総数85（口頭発表21、ポスター発表64）
3. 体育心理学専門領域会報24号の発刊を2012年6月20日付で発行をした。
4. 「体育心理学専門分科会50年記念誌」を2012年3月30日付で発行をした。
5. 会員移動2012年3月現在652名
2011年8月現在652名
6. 理事会の開催 第1回理事会を4月1日に東京工業大学大岡山キャンパスで開催された。
7. 役員選挙について 次期役員の選挙を10月以降に実施する。

<審議事項>

1. 会則の変更

荒木理事より下記の審議が行われ了承された。

（現 行）第15条 本会の会計年度は、日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門領域総会までとする。

（改正案）第15条 本会の会計年度は、当該年度4月1日から翌年3月31日までとする。

2. 2011年度（平成23年度）決算報告（平成22年8月から平成24年3月分）

菅生理事より2011年度決算報告、2012年度予算案が報告され、了承された。

3. 2013年度 事業計画

荒木理事より下記件について報告され了承された。

- ・立命館大学草津キャンパスにおいて8月28、29、30日の3日間で2013年度体育学会が行われる。
- ・学会大会における、口頭発表の発表時間の変更について検討を行う。
- ・企画委員会において、プレセミナー、キーノートレクチャー、総会、理事会を企画。他領域と連携をとって行う可能性もあり。

- ・次期役員決定に関して、選挙が行われる。10月初旬に選挙用紙を配布。10月末に選挙用紙を回収し、集計。スポーツ心理学会（金沢星稜大学）において、次期役員についての理事会が行われる予定。
- ・次回事務局について：広島大学（任期；平成25年4月1日から平成29年3月31日まで）
会報第25号（通巻53号）については、現事務局、大阪体育大学で収集し、次期事務局（広島大学）に引き継ぐ。

4. 2012年度（平成24年度）予算案

菅生理事より2012年度予算案が報告され了承された。

5. 2012年度 総会の開催

- (1) 議長の選出 吉川政夫氏（東海大学）に依頼
- (2) 総会次第について各理事で審議され了承された。

日本体育学会体育心理学専門領域
2012年度（平成24年度）総会資料

2012年（平成24年）8月23日（木）

会場；東海大学湘南キャンパス 1号館 2F（1A-202教室）

〈総会次第〉

1. 開会の辞

2. 会長挨拶

3. 議長選出

4. 報告事項

1) 当期役員（任期：平成23年4月1日から平成25年3月31日）

会 長 中込 四郎

理事長 荒木 雅信

理 事 西田 保, 伊藤 豊彦, 関矢 寛史（学会大会委員）

橋本 公雄, 石井 源信, 阿江 美恵子（企画委員）

岡澤 祥訓, 山本 裕二, 磯貝 浩久, 菅生 貴之（広報委員）

菅生 貴之, 手塚 洋介（庶務・会計委員）

監 事 津田 忠雄, 東山 明子

幹 事 松田 有司

2) 2012年度（平成24年度）事業報告について

(1) プレセミナー・懇親会の企画運営（企画委員会）

テーマ 自己成長を図るテニス授業の進め方ー競技スポーツと生涯スポーツを結ぶー

日 時 平成24年8月21日（金）

13時～14時30分 講義

15時～17時30分 実習

18時～ 懇親会

場 所 東海大学テニスコート（3～4面）

講 師 竹村 りょうこ（慶應大学SFC大学院政策・メディア研究科博士課程）

(2) 日本体育学会第63回大会における専門領域の活動（学会大会委員会）

東海大学にて開催，一般発表；発表総数85（口頭発表21，ポスター発表64）

シンポジウム，キーノートレクチャー1・2，総会，理事会

(3) 体育心理学専門領域会報の発行（広報委員会）

会報第24号（通巻52号）を2012年（平成24年）6月20日付で発行

分科会HPを随時，更新

(4) 「体育心理学専門分科会50年記念誌」を2012年（平成24年）3月30日付で発行

(5) その他 庶務および会計業務

①会員異動 2012年3月現在652名

2011年8月現在652名

3) 理事会の開催；第1回理事会 4月1日（日）東京工業大学大岡山キャンパス会議室

第2回理事会 8月22日（水）東海大学湘南キャンパス1号館3F

（1M-305教室）

4) 次期役員の選挙について

10月上旬に投票用紙の発送、投票期限は10月末

11月の日本スポーツ心理学会第39回大会（金沢星稜大学）会場にて、各委員会の引き継ぎを兼ねて現理事と新理事の出席による理事会開催（23日または24日を予定）

5) その他

5. 審議事項

1) 会則の変更

（現 行）第15条 本会の会計年度は、日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門領域総会までとする。

（改正案）第15条 本会の会計年度は、当該年度4月1日から翌年3月31日までとする。

2) 2011年度（平成23年度）決算報告（平成23年4月から平成24年3月分）

3) 2013年度（平成25年度）事業計画について

(1) 日本体育学会第64回大会における企画運営（学会大会委員会）

立命館大学草津キャンパスにて開催；2013年（平成25年）8月28日～30日

一般発表，シンポジウム，キーノートレクチャー1・2，総会，理事会を企画

(2) プレセミナー・懇親会の企画運営（企画委員会）

(3) 体育心理学専門領域会報第25号（通巻53号）の発行と専門分科会HPの充実と活用（広報委員会）

4) 2012年度（平成24年度）予算案について

5) 次期事務局について（任期；平成25年4月1日から平成29年3月31日まで）

6) その他

6. 議長退席

7. 閉会の辞

2012年度（平成24年度）総会 議事録

2012年（平成24年）8月23日（木）

会場：東海大学湘南キャンパス 1号館2F(1A-202教室)

1. 開会の辞

荒木理事長より総会を開催する旨の開会の辞があった。

2. 会長挨拶

中込会長より下記の挨拶があった。

体育心理学専門領域は本学会で2番目に多い演題数であり、会員の先生方の活動的な報告のおかげであり、感謝の意を示したい。本年度より、体育学会が公益法人となり、対社会的な活動が必要となる。研究は地道な作業であるが、スポーツ現場においてスポーツサイエンスを生かすことが求められ、それにこたえられる研究を行っていかないといけない。

3. 議長選出

事務局から議長の推薦が行われ、吉川政夫氏（東海大学）が選出された。

4. 報告事項

荒木理事長より、下記内容が報告された。

1) 当期役員（任期：平成23年4月1日から平成25年3月31日）

会 長 中込 四郎

理事長 荒木 雅信

理 事 西田 保, 伊藤 豊彦, 関矢 寛史（学会大会委員）

橋本 公雄, 石井 源信, 阿江 美恵子（企画委員）

岡澤 祥訓, 山本 裕二, 磯貝 浩久, 菅生 貴之（広報委員）

菅生 貴之, 手塚 洋介（庶務・会計委員）

監 事 津田 忠雄, 東山 明子

幹 事 松田 有司

2) 2012年度（平成24年度）事業報告について

(1) プレセミナー・懇親会の企画運営（企画委員会）

テーマ 自己成長を図るテニス授業の進め方—競技スポーツと生涯スポーツを結ぶ—というテーマにおいて学会前日8月21日で開催された。

(2) 日本体育学会第63回大会における専門領域の活動

東海大学にて開催、一般発表；発表総数85（口頭発表21、ポスター発表64）

(3) 体育心理学専門領域会報第24号が2012年6月20日付で発行された。

(4) 「体育心理学専門分科会50年記念誌」が2012年に3月30日付で発行された。

(5) その他 庶務および会員業務

①会員異動 2012年3月652名

3) 理事会の開催 第1回理事会が平成24年4月1日に東京工業大学大岡山キャンパスにおいて開催された。

- 4) 次期役員の選挙が開催される。10月上旬に投票用紙が発送、投票期限は10月末の予定。スポーツ心理学会第39回大会(金沢星稜大学)会場にて、各委員会の引き継ぎを兼ねて理事会が開催される。

5. 審議事項

1) 会則の変更

荒木理事より以下会則の変更が提案され、会員の皆様により承認された。

(現 行) 第15条 本会の会計年度は、日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門領域総会までとする。

(改正案) 第15条 本会の会計年度は、当該年度4月1日から翌年3月31日までとする。

2) 2011年度(平成23年度)決算報告(資料1)

菅生理事より、資料に基づき決算報告があった。監事の津田先生より、適正であることが認められ、会員の皆様により承認された。

3) 2013年度(平成25年度)事業計画について

荒木理事長より、下記の事業計画が説明され、承認された。

(1) 日本体育学会第64回大会における企画運営(学会大会委員会)

立命館大学草津キャンパスにて開催; 2013年(平成25年)8月28~30日

一般発表、シンポジウム、キーノートレクチャー1・2、総会、理事会を企画

(2) プレセミナー・懇親会の企画運営(企画委員会)

(3) 体育心理学専門領域会報第25号(通巻53号)の発行と専門分科会HPの充実と活用(広報委員会)

4) 2012年度(平成24年度)予算案について

菅生理事より予算案の資料を基に説明があり、承認された。

5) 次期事務局について(任期; 平成25年4月1日から平成29年3月31日まで)

荒木理事長より、来年度事務局が広島大学(関矢氏)に移ることについて説明がなされ、会員の皆様に承認された。

6. 議長退席

7. 閉会の辞

荒木理事長より、閉会の辞が述べられ、総会が閉会した。

体育心理学専門領域 「新旧理事の会」 議事録

日 時；2012年11月24日 12：30－13：30

場 所；金沢星稜大学 キャリアデザイン館 5F C53教室

参加者 中込四郎（会長） 荒木雅信（理事長）、阿江美恵子、荒井弘和、石井源信、磯貝浩久、
今中國泰、内田若希、岡澤祥訓、杉山佳生、菅生貴之、関矢寛史、武田守弘、田島 誠、
土屋裕睦、手塚洋介、橋本公雄、東山明子、森 司朗、山本裕二、松田有司

荒木事務局長より平成25・26年度体育心理学専門領域役員選挙が下記の通り行われ、新役員が決定したことが報告された。

1. 体育心理学専門領域 役員選挙結果 報告

- 1) 開票日；2012年11月8日（木）17：00－19：30
- 2) 場所；大阪体育大学スポーツ心理学・カウンセリングコース 資料整理室
- 3) 立会人；荒木雅信・菅生貴之・手塚洋介・松田有司
- 4) 開票率；10.9% [会員数652名，投票数71]
- 5) 会長選挙；投票総数71，有効投票数71
- 6) 理事選挙；投票総数355，有効投票数350，無効票3，白票2
- 7) 選挙結果（以下、敬称略）

会長 中込四郎

理事 関矢寛史，土屋裕睦，杉山佳生，伊藤豊彦，石井源信，磯貝浩久，森 司朗，荒井弘和
佐々木万丈，武田守弘，今中國泰，菅生貴之

（12位が3名あり、事務局で公正かつ厳正に抽選し、菅生貴之氏が選出された）

2. 平成25・26年度 体育心理学専門領域 理事会役員

役員の役割を下記のとおりとすることとなった。なお，事務局は関矢寛史（広島大学），田島誠（川崎医療福祉大学），武田守弘（福山平成大学）が担当することとした。

- 1) 任期 平成25年4月1日－平成26年3月31日
- 2) 会長 中込四郎
- 3) 理事 関矢寛史，土屋裕睦，杉山佳生，伊藤豊彦，石井源信，磯貝浩久，森 司朗，荒井弘和，
佐々木万丈，武田守弘，今中國泰，菅生貴之（会長推薦理事）田島 誠，内田若希，
東山明子
- 4) 理事会・委員会
 - 会 長 中込四郎
 - 理事長 関矢寛史
 - 理 事 今中國泰，磯貝浩久，佐々木万丈，土屋裕睦（学会大会委員）
伊藤豊彦，東山明子，杉山佳生（企画委員）
石井源信，菅生貴之，森 司朗，内田若希，荒井弘和（広報委員）
田島 誠，武田守弘（庶務・会計委員）
 - 監 事 田村 進，木島章文

幹事 佐々木丈予

第64回大会について下記のように説明がなされた。

3. 第64回大会について

1) 期間；2013年8月28日、29日、30日

2) 立命館大学

3) (一社) 日本体育学会第64回大会組織委員会

事務局 岡本直輝 (立命館大学スポーツ健康科学部)

〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1

Tel : 077-561-4887

E-Mail: naoki-o@ba.ritsume.ac.jp

(一社) 日本体育学会第64回大会組織委員会企画案

第64回大会組織委員会事務局

組織委員会特別企画：がんの予防・予後に必要な身体活動・運動

組織委員会学際企画1：日本発の運動・トレーニング法

組織委員会学際企画2：子どもが魅力に感じているものから探る「子どもの身体活動・運動の活発化」へのアプローチ

組織委員会学際企画3：東日本大震災からの復興に向けて

ー体育・スポーツ分野が貢献できことは？ー

組織委員会学際企画4：未来の体育・スポーツ環境を考える～スポーツスタジアム建設のノウハウ～

大学院生企画：ワークショップ～キャリアアップのための新たなスキルを身につける～

平成25年度体育心理学専門領域 第1回理事会 議事録

記録者：武田守弘

日 時：平成25年4月6日（土） 16：00～17：55

場 所：東京八重洲ホール612会議室

出席者：中込四郎（会長）、関矢寛史（理事長）、今中國泰、磯貝浩久、佐々木万丈、土屋裕睦（学会大会委員）、伊藤豊彦（企画委員）、森 司朗（広報委員）、武田守弘、田島 誠（庶務・会計委員）
欠席者：東山明子（委任状提出）、杉山佳生（委任状提出）（企画委員）、石井源信、菅生貴之（委任状提出）、内田若希（委任状提出）、荒井弘和（委任状提出）（広報委員）

挨拶（中込会長）

<報告事項>

1. 平成24年度事業（事務局）

関矢理事長より、平成24年度の事業として、①体育心理学専門領域会報第24号発行、②第63回大会（東海大学）プレセミナー、③第63回大会（東海大学）体育心理学専門領域企画、④平成25-26年度役員選挙、⑤体育心理学専門分科会50年記念誌発送、が行われたことが報告された。

2. 新理事の役割（事務局）

関矢理事長より、新理事の紹介と役割分担について報告された。

3. 会員の異動、会費納入状況（庶務・会計委員会）

田島理事より、現時点での会員数は645名、会費の納入状況は635名が入金済と報告された。

4. 会報25号（通巻53号）の編集状況と発刊（広報委員会、庶務・会計委員会）

森理事より、会報25号の原稿依頼状況が報告された。海外情報及び編集後記については適任者を検討中と報告された。4月末には原稿を回収する予定である。

武田理事より、第63回大会関連の23名分の原稿については、1名の未提出者、1名の不明者以外は回収していると報告された。6月から7月にかけて発刊を予定している。

<審議事項>

1. 平成24年度決算（庶務・会計委員会）

田島理事より、平成24年度の決算報告がなされ承認された（資料2）。ただし、理事会が4月初旬開催であったため監事による会計監査が終了しておらず、後日行われる会計監査において承認されることを条件とする。

2. 平成25年度事業案（事務局）

関矢理事長より、平成25年度の事業として、①体育心理学専門領域会報第25号発行、②第64回大会（立命館大学）プレセミナー、③第64回大会（立命館大学）体育心理学専門領域企画を行うことが提案され了承された。

3. 平成25年度予算案（庶務・会計委員会）

田島理事より、平成25年度の予算案が提案され承認された（資料3）。

また、予備費が少ないことや学会大会でのシンポジウムの充実を図るため、以下の案が提案された。

①日本スポーツ心理学会との統合、②会報の電子化による会報郵送の廃止、③プレセミナーの参加費徴収（受益者負担）、④会費の値上げ、⑤原稿料の値下げ。これらは継続審議とする。

4. 第64回大会プレセミナーについて（企画委員会）

伊藤理事より、第64回大会プレセミナーの開催案が提案され承認された。「これからの教育研究環境における体育心理学」というテーマで佐久間春夫先生（立命館大学）が講師を務める。

話題提供の後、参加者でグループに分かれディスカッションを行う形式はどうかという意見が提案され、形式は企画委員会に一任することが承認された。懇親会については、講師が大会準備などで多忙が予想されるため、開催しないことが承認された。本件の広報については会報を発送する際（6-7月）に、案内文を同封することとなった。

5. 第64回大会について（学会大会委員会）

今中理事より、第64回大会のスケジュール案および企画案が提案され承認された。スケジュールは大会事務局提案のスケジュールに合わせた。一般発表の口頭発表は、1名ずつ発表15分、質疑応答5分の計20分とする。会場の数によって口頭発表数の上限が決まるため、発表申し込み終了後、口頭かポスターの発表形態の調整を行うことが了承された。調整は学会大会委員が個別に調整に当たり、口頭からポスター、ポスターから口頭の変更をお願いすることとする。なお、大会案内の発表方法の欄に「①各専門領域の方針によりますが、口頭発表、ポスター発表のいずれかを希望することができます。但し、演題数、会場の関係でご希望に沿えない場合があります。」と記述されているため、大会側に働きかけたり大会HPに掲載したりすることはない。

土屋理事、今中理事よりシンポジウムおよびキーノートレクチャーの内容について以下の提案がなされ、承認された。シンポジウム「チーム力の育成」といったテーマで、心理学以外の専門学問領域を含めた演者を予定している。キーノートレクチャー「スポーツ立国を支えるスポーツ心理学」「知覚・認知と運動行動における潜在性(仮題)」の2題を予定している。

6. 体育心理学専門領域のホームページについて（広報委員会）

森理事より、体育心理学専門領域のホームページのサーバー移転について提案された。専門領域からの情報提供が中心のためセキュリティの問題も少なく、予算の関係もあることから、無料で開設できるHPを使用することが了承された。

<次回理事会>

日 時：平成25年8月28日（水） 12：00～12：50

場 所：立命館大学

平成23年度決算報告

資料1

平成23年度決算報告(自 平成22年度大会・総会 至 平成24年 3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	差額
収入の部				
当期収入合計(A)		740,500	823,768	△ 83,268
前期繰越収支差額		1,242,515	1,242,515	0
収入合計(B)		1,983,015	2,066,283	△ 83,268
支出の部				
当期支出合計(C)		1,172,000	1,796,799	△ 624,799
次期繰越収支差額(B)-(C)		811,015	269,484	541,531
支出合計		1,983,015	2,066,283	△ 83,268

○収入の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・前年度繰越金		1,242,515	1,242,515	0	
・年会費		600,000	682,000	△ 82,000	1千円×682名(延べ人数)
・郵便貯金(利息)		500	168	332	
・体育学会専門分科会補助金		140,000	141,600	△ 1,600	
・役員選挙実施費用補助金		0	0	0	
○収入合計(B)		1,983,015	2,066,283	△ 83,268	

○支出の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・分科会会報関連費用	小計	477,000	579,390	△ 102,390	第23号発行及び第24号作成
	印刷費	300,000	242,550	57,450	
	会報送料	52,000	40,800	11,200	510通×80円(第23号)
	原稿料	120,000	295,000	△ 175,000	5千円×59名(第23号及び第24号)
	謝礼(会報発行作業補助)	5,000	1,040	3,960	補助者へのお茶代
・シンポジウム等関連経費	小計	130,000	146,705	△ 16,705	第61回大会及び第62回大会
	謝礼(演者・司会)	80,000	115,000	△ 35,000	
	会員外交通費補助	5,000	26,680	△ 21,680	
	プレセミナー会場使用料	10,000	0	10,000	
	プレセミナー演者懇親会費	15,000	4,000	11,000	
	謝礼(写真撮影・大会運営)	10,000	0	10,000	
	シンポジウム打ち合わせ補助	10,000	1,025	8,975	
・分科会50周年記念特別事業費	外部講師等招聘費用	200,000	551,250	△ 351,250	50周年記念誌印刷費
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	50,000	0	50,000	
・役員選挙実施費	郵送費、色紙代、文具等	0	33,600	△ 33,600	前年度分の色紙代
・事務局事務費	文具、コピー費、理事会弁当代等	110,000	86,624	23,376	
・会議費	理事会、委員会開催等費用	200,000	383,060	△ 183,060	
・通信費	会員・理事連絡費	5,000	16,170	△ 11,170	
・当期支出合計(C)		1,172,000	1,796,799	△ 624,799	
・予備費(B)-(C)		811,015	269,484	541,531	
○支出合計		1,983,015	2,066,283	△ 83,268	

△は超過

*会員数昨年度648名から652名へと4名増

平成24年 3月 19日

この決算書は適正であることを認めます。

監事 津田 忠雄

東山 明子

津田 忠雄

東山 明子

平成24年度決算報告

資料2

平成24年度決算報告(自 平成24年4月 至 平成25年 3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	差額
収入の部				
当期収入合計(A)		790,200	766,469	23,731
前期繰越収支差額		929,911	269,484	660,427
収入合計(B)		1,720,111	1,035,953	684,158
支出の部				
当期支出合計(C)		1,130,000	914,185	215,815
次期繰越収支差額(B)－(C)		590,111	121,768	468,343
支出合計		1,720,111	1,035,953	684,158

○収入の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・前年度繰越金		929,911	269,484	660,427	※1
・年会費		600,000	620,000	△ 20,000	1千円×620名
・郵便貯金(利息)		200	69	131	
・会報原稿未執筆による返還金		0	5,000	△ 5,000	
・体育学会専門分科会補助金		140,000	141,400	△ 1,400	
・役員選挙実施費用補助金		50,000	0	50,000	
○収入合計(B)		1,720,111	1,035,953	684,158	

○支出の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・分科会会報関連費用	小計	470,000	436,370	33,630	第24号発行および第25号作成
	印刷費	250,000	213,150	36,850	第24号
	会報送料	55,000	49,790	5,210	第24号
	原稿料	155,000	170,000	△ 15,000	5千円×34名(第25号)
	謝礼(会報発行作業補助)	10,000	3,430	6,570	補助者へのお茶代
・シンポジウム等関連経費	小計	90,000	5,000	85,000	第63回大会
	謝礼(演者)	30,000	0	30,000	
	会員外交通費補助	40,000	0	40,000	
	プレセミナー会場使用料	10,000	0	10,000	
	プレセミナー演者懇親会費	5,000	5,000	0	
	謝礼(写真撮影・大会運営)	0	0	0	
	シンポジウム打ち合わせ補助	5,000	0	5,000	
・分科会50周年記念特別事業費	外部講師等招聘費用	0	52,300	△ 52,300	50年記念誌発送
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	0	0	0	
・役員選挙実施費	郵送費、色紙代、文具等	100,000	50,240	49,760	
・事務局事務費	文具、コピー費、理事会弁当等	10,000	84,545	△ 74,545	事務局移転費用を含む
・会議費	理事会、委員会開催等費用	440,000	282,860	157,140	
・通信費	会員・理事連絡費	20,000	2,870	17,130	
・当期支出合計(C)		1,130,000	914,185	215,815	
・予備費(B)－(C)		590,111	121,768	468,343	
○支出合計		1,720,111	1,035,953	684,158	

△は超過

*会員数昨年度652名から645名へと7名減

平成25年 3月 31日

監事 津田 忠雄

東山 明子

この決算書は適正であることを認めます。

※1 予算は平成23年度決算報告(中間報告)をもとに立案されたが、決算は平成23年度決算報告によるため、予算と決算の金額が一致しない。

平成25年度予算案

資料3

平成25年度予算案(自 平成25年4月 至 平成26年 3月)

○収入の部

款	項目	前年度決算	予算案	差額	説明
・前年度繰越金		269,484	121,768	147,716	
・年度会費		620,000	635,000	15,000	1千円×635名
・郵便貯金(利息)		69	100	△ 31	
・体育学会専門領域補助金		141,400	140,000	1,400	
・会報原稿未執筆による返還金		5,000	0	5,000	
・当期収入合計(A)		766,469	775,100	8,631	
○収入合計(B)		1,035,953	896,868	139,085	

○支出の部

款	項目	前年度決算	予算案	差額	説明
・専門領域会報関連費用	印刷費, 郵送料, 会報作成補助費等	436,370	460,000	△ 23,630	第25号発行および第26号作成
	印刷費	213,150	220,000	△ 6,850	
	会報送料	49,790	50,000	△ 210	
	原稿料	170,000	180,000	△ 10,000	
	謝礼(会報発行作業補助)	3,430	10,000	△ 6,570	
・学会大会関連経費	小計	5,000	30,000	△ 25,000	
	謝礼(演者・司会)	0	30,000	△ 30,000	非会員・専門領域非会員対象
	交通費補助	0	0	0	非会員・専門領域非会員対象
	プレセミナー会場使用料	0	0	0	
	プレセミナー演者懇親会費	5,000	0	5,000	
・分科会50周年記念特別事業費	外部講師等招聘費用	52,300	0	52,300	
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	0	0	0	
・役員選挙実施費	郵送費, 色紙代, 文具等	50,240	0	50,240	
・事務局事務費	文具, コピー費	84,545	90,000	△ 5,455	新事務局用封筒作成
・会議費	理事会, 委員会開催費用	282,860	200,000	82,860	旅費交通費・弁当代等
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	2,870	5,000	△ 2,130	
・当期支出合計(C)		914,185	785,000	129,185	
・予備費(B)－(C)		121,768	111,868	9,900	
○支出合計		1,035,953	896,868	139,085	

△は超過

編集後記

体育心理学専門領域会報第25号をお届けいたします。広報委員会に関する仕事の殆どは事務局の皆様をお願いしてしまいました。委員長を退任するにあたり、職責を果たせなかったと反省するとともに支えてくださいました事務局の皆様、貴重な原稿をいただきました多くの会員の皆様に感謝しております。

昨年度末から体罰問題で学校教育の場が大きく揺らいでいます。体罰が禁止されている事を知らない教師や指導者はいないと思います。それでも体罰が根絶出来ないのは、教育やスポーツの指導に体罰を容認する構造的な問題が存在するからだと思います。体育心理学の分野でもこの体罰が行われるメカニズムを探究する研究を積極的に行い、体罰の根絶に協力する必要があります。それだけではなく実践場面において用いる事が可能な内発的な動機づけを高める指導法を探究する必要があると思います。

これらの事を実現するために従来から体育心理学の領域で行われてきた研究を実践の場に応用するための研究が必要であると思います。蓄積された体育心理学知見を今こそ実践の場に生かす事が求められていると思います。

前広報委員会委員長 岡澤祥訓

日本体育学会体育心理学専門領域会報 第25号（通巻第53号）

発 行	平成25年7月20日 発行（非売品）
発行責任者	関矢 寛史（代表）
発 行 所	日本体育学会体育心理学専門領域事務局 〒739-8521 広島県東広島市鏡山1-7-1 広島大学大学院総合科学研究科 TEL & FAX : 082-424-6587 E-mail : tshinri@hiroshima-u.ac.jp URL : https://sites.google.com/site/jspetaikushinrigaku/

印 刷	かもめいと有限会社
-----	-----------
